

Aug. 2016

ZENBI

全国美術館会議機関誌

August 2016 [Vol.10]



デジタル高精細撮影への転換 4"×5"から無限大へ。

NISSHA はデジタル高精細撮影の無限の可能性を追及しています

従来の「4×5」ポジフィルムよりも高解像度なのにリーズナブル。

印刷用に画像分解する必要もなく、また色褪せることもありません。



最大 28 億画素まで。データ活用にあった仕様で撮影

赤外線高精細デジタル撮影が可能

豊富な国宝・重要文化財のデジタルアーカイブ実績

文化財、美術品のあるところ、どこでも出張撮影

NISSHA

日本写真印刷株式会社／日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社

東京都港区大崎 2-11-1 大崎ウィズタワー TEL : 03-6414-7300 担当：梅澤

京都市中京区壬生花井町 3 TEL : 075-823-5152 担当：中上

CONTENTS	
ブ ロ ッ ク 報 告	2 〔北海道〕 巡回展の醍醐味 土岐美由紀
	4 〔東北〕 今、この場所から―震災復興とミュージアム 奈良 香
	6 〔関東〕 新しい尺度 江尻 潔
	8 〔東京〕 次のさらなるステージへ―美術館をとりまくさまざまな変化 降旗千賀子
	10 〔北信越〕 聞こえ、思いつくままに 松矢国憲
	12 〔東海〕 美術館の位置づけ―ある数字から 高橋秀治
	14 〔近畿〕 技術の褒賞と評価の再点検 岡 泰正
	16 〔中国〕 地域のテーマは活路となるか―あらためての問い 岡本正康
	18 〔四国〕 地域と美術の関わり方 古野華奈子
	20 〔九州〕 地域を見つめて 西村勇晴
新 規 会 員 館 紹 介	22 ―― 岐阜現代美術館
	23 ―― 中村屋サロン美術館
	24 ―― 堺 アルフォンス・ミュシャ館
	25 ―― はつかいち美術ギャラリー
	26 ―― 田中一村記念美術館
	27 ―― 新居浜市美術館
	28 ―― ZENBI〔Vol.1-10〕総目次
	賛助会員各社 32
	事務局から 33
	編集後記 34
	投稿要領 35
	ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 35

巡回展の醍醐味

土岐美由紀 (とき ゆき・北海道立旭川美術館)



手前味噌だが、まずは筆者の勤務する北海道立旭川美術館の「木と生きる—アイヌのくらしと木の造形」展(2015年11月19日～1月24日)からご紹介。同展は公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が1997年以降、開催しているアイヌ工芸展で、毎年異なるテーマを設け、道内外の博物館・美術館等との共催で実施している。21回目を数えた同展が、埼玉の入間市博物館と当館で開催したのが本展だ。儀礼具のイナウやイクパスイから、狩猟道具や樹皮衣、さらに糸巻などの土産物まで、450点にも及ぶ優れたアイヌの木造形を全国から集めて展観した。ところで、全国的に展覧会予算の獲得が厳しさを増すなか、単館での大型展開催は難しい。とりわけ地理的条件から作品の輸送費がかさむ北海道は切実で、大型展は複数館巡回での企画が必須となるが、そこでも各館の個性を生かしながらテーマを掘り下げていくことが重要だと痛感する昨今である。本展でも、入間市博物館はお茶所という地域性に根ざして茶文化の研究実績やコレクションを持つことから、学芸員が煎茶文化におけるアイヌ工芸に着目、同館でコレクションの特別展示も行った。本展ではアイヌ工芸が近世より蝦夷土産として流通し、昭和期の旅行ブームとも連動して流布したことも照射しており、入間市博物館の研究でその実態の一端が明らかにされた。では、当館はどのような視点を重視したかといえば、オーソドックスながらコレクションの柱である「木の造形」としての特質や魅力の紹介で、展示ケースの設えや解説パネルも

入間会場とは一部変更し、美術館らしく造形性を強調した展示を試みた。展覧会は「祈りの造形」と「くらしの匠」の2部構成だが、その造形性の差異も見所である。本展図録も大半の作品について写真撮影から取り組み、部分図や裁ち落としを大胆に用いたレイアウトで作品の造形美を引き出したスタイルだった。当然だが、同じ作品でも鑑賞者との距離やアイレベルの設定、照明、解説文の違いで、その見え方はまったく異なってくる。アイヌ工芸はこれまで主に民俗資料という視座から照射されており、その造形に関する美術史的研究が十分進んでいるとは言い難い。美術館が博物館的資料や文化財を積極的に扱い、多様な切り口で展覧会を構成している昨今、アイヌ民俗の文化研究や展観をめぐる課題と可能性を痛感した。東京オリンピックの開催される2020年には、北海道白老町のポロト湖畔に「民俗共生の象徴となる空間」としてアイヌ文化の展示機能を備えた国立博物館や国立公園が建設される。すでに内閣官房や文化庁等の関係省庁はもとより、北海道や白老町などを核として急ピッチで準備は始まっており、どのような展観となるのか大いに期待される。

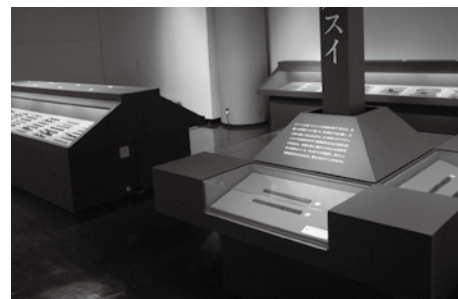
さて、巡回展における各館の個性発揮の意義については、札幌の北海道立近代美術館で開催された「日韓近代美術家のまなざし—『朝鮮』で描く」展(2015年9月1日～10月12日)でも感じた。同展は全国6館という大規模巡回展で、5年以上にわたる開催館学芸員等の地道な共同研究期間を経

て、日韓美術家の「朝鮮」体験とそこで生み出された作品群の紹介に至ったものだ。そもそも各館が、地域の出身作家や所蔵品の研究に根ざしてテーマに迫った側面があり、長期巡回による展示替えもあった。札幌会場では山口蓬春(松前生)や佐藤九二男(札幌生)等、出身作家の作品が並び、さらに佐藤の出身高校等では展覧会を軸にして世界史の授業が行われた。岐阜県美術館では、岐阜ゆかりの川合玉堂が1922年に朝鮮総督府主催の第1回朝鮮美術展に審査員として赴いた際の取材による《柳蔭閑話》が収蔵に至り、図録掲載には間に合わなかったものの、同展で特別出品されたという。“連携”は、それぞれの館の事情が絡み合い、苦労を伴うものだが、それを超えて得られるものも大きいと分厚い図録が物語っている。各館の地域に根ざした取り組みが総体として「朝鮮」をめぐる美術史を肉付けたと思う。

巡回展について述べてきたが、冬季における北海道では気候の厳しさもあって来場者の大量動員が見込めず、大型巡回展よりコレクションや地域に根ざした単館開催の企画が多い。北海道立函館美術館では道南の漁村や廃屋を描く地元画家の個展「瀬戸英樹展」(2015年11月14日～1月24日)を、

苫小牧市美術館博物館では北海道胆振・日高地方(日胆)の作家に焦点をあてた「NITTAN ART FILE インスピレーション」(2015年12月12日～1月31日)を、札幌芸術の森美術館では札幌近郊の作家9名による「モーション/エモーション 都市の活性」(1月17日～3月27日)を開催し、作家たちが風土と関わり生み出した多様な表現を紹介していた。道立函館美術館が開催した地元ゆかりの作家の個展(図録を伴う自主企画特別展)はこれまで16作家に及び、道南の美術の検証を着実に重ねている。また、苫小牧・札幌の両館は地域の作家を紹介するシリーズ企画で、テーマを設けているが、今回はともに地域の特性(都市景観や歴史、自然等)と作家の結びつけ方に企画性が強くあらわれていた。

北海道は広い。他県以上に、道内各地の美術館がそれぞれの地域の美術活動の拠点として大きな存在感を放っている。点在する各館が互いに刺激合いながら活動することが広大な北海道の美術文化を活性化する原動力になる。大量動員には結びつかずとも、長い目でみて収穫の大きい活動の一つが地域に根ざした魅力的な展観を実現することに違いない。観覧料収入の増収策に奔走する昨今、自戒をこめてそう述べたい。



北海道立旭川美術館「木と生きる—アイヌのくらしと木の造形」会場風景(イクパスイの展示)



苫小牧市美術館博物館「NITTAN ART FILE インスピレーション」会場風景(藤沢レオ《場の彫刻Ⅳ》2015年)

今、この場所から —震災復興とミュージアム

奈良 香 (なら かおり・秋田県立近代美術館)

東日本大震災から5年が経過した。地震発生後に襲来した津波、そして原発事故に伴う放射能汚染など、各地に甚大な被害をもたらした災害からの復興活動は今も続いている。思えば、日本に“ミュージアム”が誕生してから100年に満たない。その間に起こった激甚災害として阪神淡路大震災を思い浮かべる方も多いと思うが、あれから20余年が経過した現在も、記憶は過去のものとはなっていない。そして、本稿を執筆している2016年4月には、熊本を中心とする九州地方で激震が頻発している。こうした、人間の想像をはるかに超えた脅威に直面するたびに“アートは、そしてアートに携わる者は何ができるのか”という問いが繰り返し頭をもたげてくる。『ZENBI』誌上では2012年の創刊号より、文化財レスキュー活動をはじめ様々な角度から震災関連の報告がなされてきた。本稿では、2015年度下半期に福島県で開催された、震災に関わる二つの展覧会を中心に取り上げてみたい。

福島県では、2012年度より福島県立博物館と県内の大学、文化施設、NPO等が連携して実行委員会を組織し「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」を展開している。同プロジェクトは文化活動の支援を通して福島の復興に尽力することを目的としており、年度ごとに成果と課題を洗い出しながら、県内各地で複数の活動を進行させている。

南相馬市博物館では2015年10月24日から12月4日まで「SACRIFICE 一眠る地層にささげる花一片桐功敦作品展」が開催された(主催:南相

馬市博物館/協力:はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト)。大阪府在住の片桐は、1997年に華道みささぎ流の家元を襲名した気鋭の華道家である。そのスタイルは伝統的なものから現代美術的なアプローチまで幅広く、花を活ける行為を通して数々の寓意的な空間を生み出している。片桐は、同プロジェクトの呼びかけに応じて2013年の秋に初めて南相馬市を訪れ、市内各地取材して回った。幾度かの訪問の後、同年の冬から2014年の夏にかけて南相馬市に滞在し、野に咲く花を活け、その空間を撮影する活動を続けた。この時、片桐が花器として選んだのが、南相馬市博物館が所蔵している土器などの博物館資料であり、被災地のガレキの中に放置されていた長靴などの日用品であった。花器として使用された博物館資料は、言うまでもなく同地で重ねられてきた悠久の時と文化の蓄積を表すものである。また、既にガレキとなってしまう日用品にも、それぞれに人々の営みの痕跡の思いが宿っている。片桐は、それらの花器に、今を懸命に咲く花々を盛り、巡る命の尊さと未来への想いを込めた「SACRIFICE(供物・捧げ物)」として表した。「SACRIFICE展」では、片桐自身が撮影したこれらの“いけばな”の写真パネルと、花器として使用された博物館資料がコラボする形で展示された。

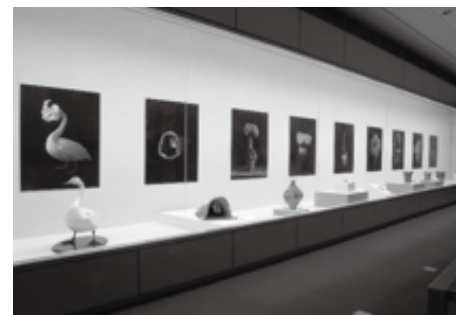
福島県立博物館では、2月11日から3月21日まで、ふくしま震災遺産保全プロジェクト・アウトリーチ事業として、特集展「震災遺産を考えるーガレキから我歴へ」が開催された(主催:ふくしま震災遺

産保全プロジェクト実行委員会/共催:東北大学学術資源研究公開センター、東北大学災害科学国際研究所、東北大学グローバル安全学トップリーダー育成プログラム)。内容は2014年度から開始した震災遺産の調査・収集活動によって集められた資料や写真パネルの紹介を通して、震災から5年を経過した福島を振り返ろうとするもので、展示品には、震災の時刻のまま止まっている時計(富岡市・いわき市)、津波で曲がった橋の欄干(いわき市)、震災当日の新聞が入ったままの自動販売機(浪江町)、仮設住宅の張り紙(桑折町・三春町)などがあり、震災以前、それぞれの地にあった人々の生活や日常と、震災の爪痕が生々しく伝えられていた。また、展示室内には特設コーナーが設けられており、福島県内の様々な震災遺構を、最新技術MRを用いた3次元バーチャル映像によって体験することができた。震災直後にボランティアとして現地入りした頃

の衝撃がよみがえるとともに、震災を伝え、復興に貢献するためにミュージアムが果たせることについて改めて考えさせられる展示であった。

今年5月17日から6月26日まで、東京藝術大学大学美術館を会場として「いま、被災地からー岩手・宮城・福島の美術と震災復興ー」が開催された(主催:東京藝術大学、全国美術館会議、岩手県立美術館、宮城県美術館、福島県立美術館)。この展覧会により、岩手・宮城・福島の県立美術館が所蔵する秀作が一堂に展示されるだけでなく、一連の文化財レスキュー活動の記録や修復作品なども紹介された。

復興に向けた活動は続く。地域の文化活動の拠点として、また、日本のミュージアムの中の一館として、今、この場所から何ができるのか、模索しながら活動を続けていきたいと考えている。



「SACRIFICE 一眠る地層にささげる花一片桐功敦作品展」会場風景
(写真提供:南相馬市博物館)



特集展「震災遺産を考えるーガレキから我歴へ」会場風景
(写真提供:ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会)

新しい尺度

江尻 潔(えじり きよし・足利市立美術館)



2016年1月31日、神奈川県立近代美術館鎌倉館が閉館した。「かまきん」の愛称で親しまれ、60年以上にわたりこの国の美術界を牽引した同館のクローズはまさに一つの時代の終焉として眼に映った。同時に近代美術の大きな流れを記述する作業に一区切りついたとも思えた。高橋由一、萬鐵五郎、関根正二、村山槐多、佐伯祐三、松本竣介など、重要な作家たちを評価し、しかるべき位置に据えた同館の功績はこの上なく大きい。密度の高い仕事の推進力として敗戦間もない時代の「飢え^{かつ}」があったのではないだろうか。焼け跡からようやく立ち上がり、歩み始めた戦後日本にとって彼らの作品は支えとなり自信を取り戻すようになったことだろう。鎌倉館の閉館により戦後日本が一段と遠のいた気がした。

しかし、美術作品が人々の支えとなることは現代も変わらない。社会が硬直化すればするほど、芸術の役割は大きくなる。評価の定まった作品も新たな解釈、切り口で提示され、新鮮な驚きをともなう立ち現れてくる。それは作品が「生きている」ということであり、それを示すことが私たちの役目だと思う。「生きている作品」は何も美術史の一等星ばかりではない。埋もれたほとんど無名の作家の作品も力をもったものがある。私事で恐縮だが、地方の美術館に勤めているとなぜこれほどの作家が埋もれていたのかと驚くことがある。地方に住み、大きな公募展にも出品しなかったこともあるが、彼らを位置づける文脈と受け皿が整っていなかった

ためでもある。今期、未だ位置づけられていない作家を評価する展覧会が北関東で相次いだ。

宇都宮美術館で開催された「齋藤富蔵展」(2月14日～4月10日)は10年ほど前までほとんど知られることのなかった画家の回顧展である。同館の調査によりその特異な存在が明るみに出た。自身を蛾にみたて深山に遊ぶ一連のシリーズをはじめ彼の仕事は戦後美術の主流に属していない。「従来の美術史の水準では語りえない独自の表現を生み育て形成しえたこと」によって「戦後美術史にこれまで看過されてきた表現性と問題意識を示し、今後さらに検証の機会を積んで、新しい解釈の切り口と可能性を戦後美術史に記すようになるだろう」と谷新氏は図録の巻頭論文で述べ、既存の尺度では測りきれない、あるいはすり抜けてしまう価値を齋藤作品に見出している。私は本展を見て、いわゆるメインストリームに属する画家にはない魅力に引かれた。齋藤がもし同時代の「はやり」に流されてしまったらこのような力強いメッセージ性は打ち出せなかったことだろう。時流に流されることなく自身の資質に見合うスタイルを見出している。それが、生き生きと伝わってきて心地よかった。

栃木県立美術館では「戦後70年 もうひとつの1940年代美術」(2015年10月31日～12月23日)が開催された。本展は「戦後の美術史で主要画家として記録されず、展示される機会が少なかった栃木県出身の画家や」分野によって別々に展示されていた「工芸家、版画家の作品を一堂に

会し、『非主流画家』による1940年代の美術を振り返り」の野心的な企画だった(引用は図録収載の小勝禮子「もうひとつの1940年代—それぞれの美術史」)。敗戦を迎えた45年を境に作家たちは否応なく意識の変革を求められた。作家によっては深く傷つき描けなくなった者もいる。戦争のさなかにおいてじっと護り続けていたものを一気に戦後開花させた作家もいた。とても興味深かったのは竹工藝や陶芸も戦争により物質的にも精神的にも影響を受けていたことである。工芸家たちもまた戦意高揚の作品を作るよう迫られていた。工芸における戦争の影響について考えたことがなかったため、このような切り口の展示はとても刺激的だった。非主流の作家を多く含んだ本展は、「無名者」ゆえの抗いと葛藤、時流に絡めとられていくありさまの「記録」でもあった。今の私たちと地続きに見え身につまされる。

最後に「群馬 NOMO グループの全貌」展(1月16日～3月21日)に触れる。1960年代、日本各地で前衛美術グループが同時多発的に起こった。1963年前橋を拠点とした「群馬 NOMO グループ」もそうした一つだ。東京一極集中の構造を地

方から突き崩すべく活動を展開した。グループは69年に活動を休止するが、既存の形式を打ち破る先駆性は評価され、断片的ながらも紹介されてきた。本展は、その軌跡をたどり全貌を明らかにするものだ。中央に絡めとられまいとする熱気が数々の試みから感じられた。だが、中央からの影響がなければこのような活動は生まれなかったことは確かだ。しかし、重要なのはそれが深化し、根づき、独自のものを生み出す力へと変わっていくプロセスだ。それが本展から看取できた。彼らは地方における可能性に着目した。これは独自の尺度をもつことに通じる。それには批評という行為が必要だった。このことは現代においても何ら変わりはない。彼らがいかなる尺度を見出し、それが今どのように働いているのか、さらなる検証を期待したい。

今後、さまざまな尺度が要請されることだろう。新たな尺度により今まで見落としていた価値あるものが見出されていく。同時にすでに輝く一等星と新たに発見された星々は繋がっていくことだろう。それは美術史において新しい「星座」を描くことであり、今後そのような展覧会が増えることを願ってやまない。



栃木県立美術館「戦後70年 もうひとつの1940年代美術」会場風景

次の、さらなるステージへ —美術館をとりまくさまざまな変化

降旗千賀子（ふりはた ちかこ・目黒区美術館）

戦後 70 年。東日本大震災から 5 年がたった。2015 年は、日本がこの先どこへ向かうのか、社会の動向を見ても、いろいろ考えさせられる年だった。当館は、年度最後に「気仙沼と、東日本大震災の記憶」（2月13日～3月21日）を、友好都市である気仙沼市のリアス・アーク美術館協力のもと開催した。そして 2016 年。「鎌倉からはじまった。1951 - 2016 (part 3)」（2015 年 10 月 1 日～1 月 31 日）。神奈川県立近代美術館の鎌倉館 65 年にわたる歴史の感動的な閉幕から、まさに始まり、そして 50 年間、丁寧に作家を支えてきた銀座のみゆき画廊もこの 3 月、ビル建て替えのため扉を閉じた。それぞれが持つ種子の新たな展開が期待される閉館一。さらに、1980 年代に開館のピークを迎えて採用された美術館学芸員の世代交代劇がにわかに始まっている。最近のこうした動きを注視していくと、美術館をとりまく状況が次の時代へと舵をきり、大きく変化する時が来たことが感じられる。

区立美術館も、板橋、渋谷、に次ぎ 3 番目に開館した練馬区立美術館は「アルフレッド・シスレー展」（2015 年 9 月 20 日～11 月 15 日）で昨年 30 周年を迎えた。今年は世田谷美術館が、来年はわが目黒区美術館も 30 周年を迎えることになる。

昨年後半期には、さまざまな変化が到来したことを思わせる展覧会が続いた。「世界が先に驚いた。」というキャッチコピーで話題をさらった永青文庫の「春画展」（2015 年 9 月 19 日～12 月 23 日）。紆余曲折あり難関を突破し開幕にこぎつけた裏話

に、日本も「ようやく」ここまでたどり着いたという思いを抱かずにはおれなかった。そして戦後 70 年の企画として、東京国立近代美術館のコレクションによる「藤田嗣治、全所蔵作品展示。」（2015 年 9 月 19 日～12 月 13 日）では、戦後帰還した戦争画 14 点が一挙「ついに」展示されたことに、ある種の感慨を抱いた人も多かったはずだ。

このところ相次いで開催された明治美術からの日本の近代美術展でも、今までの美術研究における蓄積が、美術館を通して次のステージを迎え、深化していることをそれぞれの構成を見て実感した。昨年後半から続く巨匠展。関東ブロック「五姓田義松展」「原田直次郎展」に続き、東京国立博物館「黒田清輝展」（3月23日～5月15日）、千葉市美術館「吉田博展」（4月9日～5月22日）。さらに挙げると、町田市立国際版画美術館「清親—光線画の向こうに」（3月12日～4月17日）、東京国立近代美術館「安田靉彦展」（3月23日～5月15日）、サントリー美術館「宮川香山展」（2月24日～4月17日）。美術館をいくつもフィールドワークして明治期の日本近代美術の理解を深める、というスペクタクルな充実感があつた。

さて、今年前期海外の大型美術展といえば、日伊国交樹立 150 周年を記念したイタリア美術展が見ごたえがあり、色彩・表現・物語が交差する会場に何度も通いたい衝動に駆られた。東京都美術館「ボッティチェリ展」（1月16日～4月3日）、国立西洋美術館「カラヴァッジョ展」（3月1日～6

月 12 日）では、精緻で技巧的な色彩表現に目が釘付けになった。同じ東京都美術館では、そのあと日本における江戸の芳醇な色彩表現を存分にアピールした「若冲展」（4月22日～5月24日）が開かれ、「釈迦三尊像」と「動植綵絵」のジオラマのような展示から放たれる崇高な妖気には、眩暈を覚えたほどだ（ほんとうはメチャ混んでいたのだ）。

現代の方では、作家と学芸員、美術館と作家の関係に、とことんこだわり企画した学芸員たちの熱気と熱意を十分感じさせた「若林奮 飛葉と振動」（1月9日～2月28日 府中市美術館ほか）は、各開催館のカラーが加えられて構成され、作品の見え方も異なり、若林展めぐりもいつしか長期戦の楽しみになっていた。

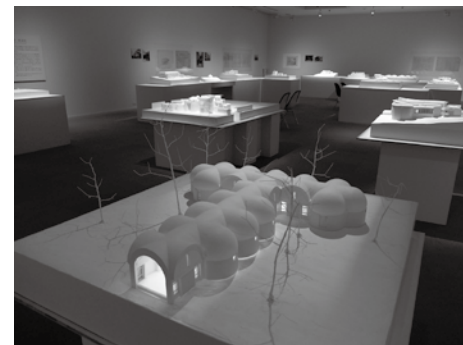
最後に、近年、多くの来館者を集めている、建築やデザインの展覧会が増えてきたことにもぜひ触れておきたい。国立近現代建築資料館「ル・コルビュジエ×日本展」（2015 年 7 月 21 日～11 月 8 日）、東京都現代美術館「オスカー・ニーマイヤー展」（2015 年 7 月 18 日～10 月 12 日）、21_21 DESIGN SIGHT「建築家フランク・ゲーリー展」（2015 年 10 月 16 日～2 月 7 日）、森美術館「フォ

スター+パートナーズ展」（1月1日～2月14日）、世田谷美術館「竹中工務店 400 年の夢展」（4月23日～6月19日）、国立新美術館「MIYAKE ISSEY 展」（3月16日～6月13日）など。ユニークなところでは武蔵野市立吉祥寺美術館での漆喰の鏝絵作家「伊豆の長八」（2015 年 9 月 5 日～10 月 18 日）もここに加えておきたい。

昨年 9 月まで目黒区美術館で開催した「村野藤吾の建築—模型が語る豊饒な世界」（2015 年 7 月 11 日～9 月 13 日）では、本展を開催するきっかけになった目黒区総合庁舎（旧千代田生命本社 1966 年・村野藤吾設計）の建築ツアー（毎年 4～5 月に開催、今年 12 年目になり、9 名の建築ボランティアで行っている）が、300 名以上の参加者を集める人気プログラムに成長している。この春には、「村野建築ネットワーク」も立ち上げ、八ヶ岳美術館（長野）、谷村美術館（新潟）など、地方の村野建築での建築ツアーの同時期開催をよびかけ確かな手ごたえを感じた。美術館の次のステージを支えていく幅広い客層を獲得するための新しい展開として、他館にもぜひおすすめしたい活動でもある。



神奈川県立近代美術館 鎌倉「鎌倉からはじまった。1951-2016 Part 3」
クロージング・レセプション風景 1 月 16 日



目黒区美術館「村野藤吾の建築—模型が語る豊饒な世界」会場風景
手前の模型は、八ヶ岳美術館（1979 年）

聞こえ、思いつくままに

松矢国憲 (まつや くにのり・新潟県立近代美術館)



今年は暖冬で降雪量が少なかったが、例年雪深い北信越地域は、出掛ける出足が鈍くなる。それを言い訳として北信越ブロックの美術館をくまなく見渡しているには程遠いが、目にとまった27年度下半期の美術館の状況をお伝えする。

石川県立美術館では、北陸新幹線開業に合わせ、年間方針を「石川ならではの美術」として展示が行われた。1月4日から2月14日まで「工芸にみる石川の巨匠」では、芸術院会員6名と無形文化財保持者22名の技と表現が紹介された。新幹線開業により加賀百万石、金沢への注目度が一層高まり、同館のコレクション展では入場者が前年比40%増と館だよりに記されていた。こうした工芸の都市として全国的に知られる金沢は、現代美術の金沢21世紀美術館もあり話題性に事欠かないが、この地域への東京国立近代美術館工芸館の移転が、3月22日、政府関係機関移転基本方針に決定された。これが実行されれば、より一層の工芸の街という知名度が高まるであろう。

来年の新築移転を進めている富山県立近代美術館では、2月8日新美術館開設準備委員会で新しい館名が検討され、「富山県美術館」に絞られた。また、3月1日に石井知事が県議会で開館記念展のテーマを「生命(せいめい)と美」とすることも発表した。来年の開館に向け、3月19、20日にPRイベントが隣接施設や、近代美術館で開かれ、開館に向けた機運を盛り上げている。建て替え計画は、長野県信濃美術館でも進んでおり、3月23日、

第5回の整備検討委員会で整備方針が決定され、阿部知事に報告されたと聞く。

富山県立近代美術館に戻るが、前号でも紹介された同館での世界ポスタートリエンナーレトヤマは、30年を迎え、多くの応募があったと聞く。そうした同館のポスターコレクションの協力を得て、当新潟県立近代美術館では、「亀倉雄策と『クリエイション』」を2015年11月14日から1月17日にかけて開催した。デザイン界のパイオニア亀倉雄策は、本県出身であり、生誕100年を記念して新潟市にある新潟県立万代島美術館で上半期の2015年7月11日から8月30日まで亀倉のポスターだけでなく、制作の元となったスケッチや版下などの資料を紹介したところだが、当館の同展では、亀倉独自の視点で取り上げ編集したデザイン誌『クリエイション』に掲載された世界のデザイナーたちの作品を紹介した。あまり知られていないデザイナーや作家もあり、連絡が取れず、悪戦苦闘した展覧会であったが、亀倉の目をとおした古さを感じさせないデザインの今を紹介できたのではないと思う。

また、新潟県立万代島美術館で2015年11月28日から2月28日まで開催された「蜷川実花展」では、原色の色使いのカラープリントが会場所狭しと飾られた。最後の1コーナーに設けられた長岡の花火を撮影した蜷川の写真は、上越新幹線で4月29日からゴールデンウィークや土日に臨時運行する「現美新幹線」の車体を飾るものとしてニュースとなっている。

大仕掛けのニュースの一方で、地域の地道な展覧会に目がとまった。

新潟市美術館での「川村清雄展」(2015年11月3日～12月20日)は、江戸東京博物館で2012年に開かれ、翌年静岡県立美術館に巡回した大規模回顧展とは違った、新潟との繋がりに眼を向けた構成であった。清雄の祖父が新潟が幕府直轄領となった時の初代奉行で、港町新潟を創った偉人としてその関連資料を皮切りに、土地の豪農旧市島家に伝わった清雄の新出作品が、早稲田大学津八郎記念博物館寄託の作品と比較展示されていたりと、興味が尽きなかった。

福井県立美術館では、コレクションを活かした「戦後 福井の美術―前衛に生きた人々―」が2015年12月5日から1月17日にかけて開催された。残念ながら何うができなかったが、戦後、各地で高まった前衛美術運動の福井版と思う。具体や九州派、パンリアルなどの大きな前衛運動ではないかもしれないが、戦後70年を迎えた今、遠い歴史に入り始めており、各々の地域的美術館が記録に残すことは、各地域の美術史を辿るよすがとして重要となってくると思われる。

地域に偏りがあるが御容赦頂き、平成27年度下半期北信越ブロックの報告とさせていただきます。



新潟県立万代島美術館
「亀倉雄策と『クリエイション』展」チラシ



新潟市美術館
「川村清雄展」チラシ

美術館の位置づけ —ある数字から—

高橋秀治（たかはし しゅうじ・岐阜県現代陶芸美術館）



全国美術館会議の会報誌『ZENBI』のブロック報告では、書き手はほとんど学芸系の人で、主に展覧会にまつわる話題が中心と理解している。筆者はこの3月まで愛知県美術館の副館長であったが、館長ともども学芸系という珍しい美術館であったことから事務的な仕事のウエートが重くなり、ここ数年展覧会を見て回る頻度が少なくなりがちで、とくに昨年度は東海ブロックの美術館が開催する展覧会を、しっかり見たとは言えない。そこでこの原稿では、これまでとはやや異質なものになることを、お許しいただきたい。

全国美術館会議の加盟館の設立母体はさまざまであり、また施設規模もバラエティに富んでいるが、今回は特に公立館に絞って話を進めたい。都道府県立美術館以外の館の方々にとってはなじみは薄いですが、都道府県立美術館には、「都道府県立美術館副館長および事務責任者会議」という横のつながりがある。筆者はこの会議の東海ブロックの幹事として、一昨年度、昨年度と幹事会へ出席したり、定例会の開催館となってその運営、進行を行ったりした。そのなかで、学芸サイドからの見方だけでなく行政サイドからの美術館の運営状況や課題について考える機会を持った。事務責任者会議は都道府県立美術館に限られているので、全国美術館会議加盟館とは同じではないが課題は共通するものも多い。定例会での実際の協議事項にはならなかったことであるが、幹事会の情報交換の中では、どの美術館も学芸

員の人材育成や管理職の登用の問題を抱えていることがわかった。学芸員の人材育成の問題の一つには、年齢構成が深く関係している。それぞれの館の状況は一律ではないにしても、学芸員の定数自体が少ないこともあり、また開館時に一時に採用した結果として、年数を経ても年齢構成に偏りがあるのは共通した問題である。さらに学芸員は高学歴者が多く、また中途採用される人も多くて、行政職のような経験年数を基準に昇任、昇格が行われると、管理職に登用されるのが遅くなりがちで、いきおい館長などは国立館などの経験者や、行政職の再任用先として非常勤を当てる場合が多く見受けられる（筆者も今年度からその一人となったのはなんとも言いようがないが）。一口に非常勤といってもその勤務形態は、ほぼ常勤と変わらない場合から、名誉館長的な位置づけまで幅があって大きな開きがある。全国の都道府県立美術館の常勤館長の割合は、昨年度加盟館65館（一県一館とは限らない）のうち11館と少なく、およそ6分の1、また館長の専門性を見ると、行政職館長は31館で、専門職館長は34館と拮抗している。そこで、全国美術館会議の東海ブロックに目を向けてみると、公立館は静岡県では18加盟館のうち8館、愛知県は20加盟館のうち13館、岐阜県は5加盟館のうち4館、三重県は2加盟館のうち1館であり、全部で26館ある。それら26館の公立館のうち、常勤館長は11館、非常勤館長は15館で若干非常勤館長の割

合が大きい。都道府県立の全国傾向に比べると常勤館長が位置づけられている割合は大きいと言える。また専門職館長は18館、行政職館長は8館となっており、専門職の館長が位置づく割合はこれも全国的な割合と比較すると東海地域は多いと言える。さらに、指定管理者制度の導入状況をみると、東海ブロックの公立館で指定管理者制度を導入しているところは8館であるが、それらは市町立のみで、都道府県立の導入状況が65館のうち22館ということから比較すると、東海ブロックは県立美術館での導入は進められてはいない。これらの様子から単純に論じるのは乱暴かもしれないが、東海ブロックの自治体が美術館活動をどのように位置づけようとしているのか傾向が感じられる。もう一つの問題は美術館を所管する自治体の部署である。博物館法によれば衆知のとおり教育委員会の所管が登録博物館の要件なのだが、近年自治体立の美術館が教育委員会から離れ、観光などをつかさどる部署に編入されたりする例が増えている。全国的に見てもその流れはあきらかになってきており、都道府県立美術館65館の

うち、平成17年度では教育委員会以外の所管であったのが21館であったのが、26年度時点では36館に増加している。この状況は、博物館法の規定があまり忖度されなくなって、社会教育施設としてより観光資源として見られるようになるなどして、収益などについても、強く意識されるようになってきているのではないと思われる。そして東海ブロックでは、現在公立館26館のうち教育委員会の所管となっているのは8館のみで、教育委員会以外の割合が非常に高くなっている。これらのことから東海地域では、他の地域より美術館の専門性についてはそれなりに意識されているが、一方では美術館の機能として生涯学習施設としての側面が薄くなりがちになってきているのかもしれない。ここへきて最新のニュースとして、静岡県知事が県立美術館を県立大学の附属機関に移管し、学芸員も県職員から切り離して、大学職員とする構想を発表したことがネット上で話題となった。これもよくいえば、美術館の研究施設としての専門性に着眼した点だとも言えそうである。今後の動向を注視したい。



静岡県立美術館外観



教育委員会から知事部局へ移行した岐阜県現代陶芸美術館

技術の嘆賞と評価の再点検

岡 泰正（おか やすまさ・神戸市立小磯記念美術館）

熊本を中心とする大地震の報に打ちひしがれる思いのまま本稿を書くことになった。阪神淡路大震災を美術担当の博物館員として経験した者として、美術品が今まさに被害を受けている痛みを誰でもまれるように感じる。古代遺跡が、意図的に破壊されるニュースには義憤を感じ、災害を前にしては諦観にも似た呆然とした気持ちでやるせない。それでも落ち着けば、美術が魂を鎮め、被災者の傷ついた心を、癒し勇気づけることを私は震災後に経験し、その意思さえあれば、すぐれた文化は未永く残ると確信している。

さて、2015年10月から2016年4月の近畿の美術展（巡回展を含む）を通覧して印象深く思うのは、関西の文化風土に特化した地道な研究の充実である。西宮市大谷記念美術館における「松谷武判の流れ展」（2015年10月10日～12月6日）、兵庫陶芸美術館における「市野雅彦 軌跡、丹波にて展」（2015年9月5日～2月14日）、京都文化博物館における「小川千甕展」（2015年12月8日～1月31日）、和歌山県立近代美術館における「宇佐美圭司回顧展」（3月1日～4月17日）、「生誕110年 村井正誠展」（2015年12月18日～2月14日）などは、新たな視点で美術家の仕事の再評価を試みる作業であり、地元の美術館ならではの貴重な成果と考える。

初公開作品を多く含む「松谷武判の流れ展」、関西圏では初となる「宇佐美圭司回顧展」は、現代美術を20世紀の評価から、一つの時代相として、

新たに回転台の上に置き直し、21世紀の視点と頭脳で点検する作業として回顧展が行われたように感じた。こうした点検は、美術館の役割で、固定した見方を検討する装置として、美術館と学芸員の役割がうまく働いているとみなすことができる。

周年の展覧会としては、大阪市立美術館における「伝説の洋画家たち 二科100年展」（2015年9月12日～11月1日）、奈良県立美術館における「錦絵誕生250年 浮世絵版画 美の大世界展」（2015年10月10日～12月6日）、佐川美術館における「没後400年 古田織部展」（2015年10月10日～11月23日）、伊丹市立美術館における「没後30年 鴨居玲展」（2015年10月31日～12月23日）、先の「生誕110年 村井正誠展」、アサヒビール大山崎山荘美術館における「山本為三郎没後50年 三國荘展」（2015年12月22日～3月13日）、入江泰吉記念奈良市写真美術館における「生誕110年 回顧 入江泰吉の仕事展」（2015年10月10日～12月23日）、大阪市立東洋陶磁美術館における「没後100年 宮川香山展」（4月29日～7月31日）、兵庫県立美術館における「生誕180年記念 富岡鉄斎展」（3月12日～5月8日）などが意義深い展観として挙げられる。琳派誕生400年に合わせて、京都国立博物館、京都国立近代美術館、樂美術館、美術館「えき」KYOTO、京都文化博物館、細見美術館などが、それぞれの棲み分けで展覧会を開催した。琳派は、後期浮世絵が西欧の影響を受容しているのに対して、京都

ブランドの純度の高い和様の美と言ってよく、近現代まで続く様式として桜が開花するように各美術館が同テーマでいっせいに提示して見せる光景は圧巻であった。後世の美術が、意匠化された王朝のみやびというものに、いかに恩恵をこうむっているのかを一目で了解することができた。

私が注目するのは、工芸における高度な熟練の技術・超絶技巧を前にしての嘆賞の傾向である。美術館「えき」KYOTOにおける「細密美！明治のやきもの～幻の京薩摩展～」(1月2日～1月31日)、先の「宮川香山展」、兵庫陶芸美術館における「明治有田 超絶の美展」(3月19日～6月5日)は、企画の背景に、拡散しオブジェ化する現代陶芸に対して、美意識を度外視した有無を言わせぬ明治期の装飾技巧—それには江戸時代を通じての伝統が脈打っているわけだが—非凡な職人の手わざに驚嘆し、時代の進行のなかで消えていった技術と才能を惜しむような思いを強く感じた。現代人から見て、明治の工芸が異世界として蘇生したと言えるかも知れない。絵画では、勤務する神戸市立小磯記念美術館で開催した「野田弘志展」(2015年11月14日～

1月31日)は、予想のほか好評で、徹底した写真による静謐な空間表現に対する鑑賞者の賛同を、私はタブローにおける技術への回帰、絵画が突き進んできた抽象性の高い表現への揺り戻しのように感じたことである。

ことに私が勉強になった展覧会は、大阪市立東洋陶磁美術館における「新発見の高麗青磁展」(2015年9月5日～11月23日)、滋賀県立近代美術館における「ビーズリーと日本展」(2月6日～3月27日)、MIHO MUSEUMにおける「かざり—信仰と祭りのエネルギー展」(3月1日～5月15日)、姫路市立美術館における「画家の詩、詩人の絵展」(2月13日～3月27日)、神戸市立博物館における「我が名は鶴亭展」(4月9日～5月29日)などである。沈没船の遺物は、これまでの高麗青磁の年代特定に書き換えをうながす画期的なものであった。ビーズリーは、線が生命力を持つてうごめき、その源に日本のアニミズム的描線との関連が感じられて多くの示唆を得た。「画家の詩、詩人の絵展」は、テーマ設定の妙に感心し、文学と絵画の取り合わせにビーズリー展との共通項を見て、二つの展覧会の同時出現の符合に驚かされたのである。



神戸市立小磯記念美術館「野田弘志展」作品の前には学芸員が子どもたちへ語りかけるワークショップ



兵庫陶芸美術館「明治有田 超絶の美展」会場風景

地域のテーマは活路となるか —あらためての問い

岡本正康 (おかもと まさやす・下関市立美術館)

広島市現代美術館の福永治館長による前回のブロック報告は、巡回展をめぐる話題から口火を切られていたが、展覧会事業を巡回展を柱として回していく状況、それは報告者の所属する下関市立美術館でも常態である。参考までに下関の場合、近年、1年度内に巡回展を2から3本誘致してこれを「特別展」とし、その合間に4、5本の「所蔵品展」を組んでいる（なお、当館には常設展示スペースがなく、特別展開催時に所蔵品は展示しない）。自主企画については、枠の確保はしていないものの、ゆかりの作家やテーマを軸に周年企画としての提案など機会をうかがいつつ実施する方針である。しかしながら、当館もご他聞に漏れず、今後、一定以上の規模の自主企画を実現しようとするなら、かつてよりも格段に状況は不透明となっている。

そこでありきたりではあるが、下関市立美術館では、所蔵品展と特別展の中間的な小企画展の可能性をさぐり直そうとしている。今節、その一つとして、「特別展示（研究報告）山口の八幡信仰—八幡縁起絵の創造と展開」を開催した（1月5日～2月21日）。これは所蔵品展（No.130「いきもの—動物・植物・虫をめぐる美術」）の枠内で開催（会期・観覧料共通）し、通常「所蔵品展」で使用する展示室3室のうちの1室をこの展示に充てた。

山口県内に異例な数の八幡縁起絵が遺されていることについては、かねてより地域の研究者を中心に注目され研究の蓄積もなされてきたが、今回の展示は、当館学芸員も参加した近年の調査の成果

を発表したもので、山口県西部（下関市と宇部市、美祢市）を対象を絞り、各市の指定文化財をあわせて9件出品。会期中にはシンポジウム（2月6日）を設定、館外の企画協力者をはじめ地元を中心に研究者の参集を得た。このような研究的な色彩を前面にした開催で、人員・時間・経費など制約ある中で行ったものとしては好感をもって受け取られた。一方で、本展示の受け皿が歴史博物館ではなくてなぜ美術館なのか、という率直素朴な感想も投げかけられたが、それはかえって展覧会づくりの思想が来観者に意識されたという点で好ましい反応ととらえている。今回の実績をもとに本テーマについては、将来本格的な企画展に発展させる心積もりである。

さて、自館の話題に多くを割いてしまったが、当節の中国ブロックにおいて、美術館が地域のテーマといかにかかわるかという点で注目されるのは、やはり広島市現代美術館の「ディン・Q・レ展：明日への記憶」（3月19日～5月15日）であろう。ベトナム戦争終結40年、そして日本にとっても第二次世界大戦の「戦後」70年となった年度の終りを飾る展覧会である。同館では、昨夏の「ライフ＝ワーク展」（2015年7月18日～9月27日）をはじめとする展覧会をもって第二次世界大戦から現代への歩みをあらためて問うたが、被爆地「ヒロシマ」への視線がアジアとの関係において複合的なものとなっている現在、同館がベトナム戦争—アジアにおける戦争をテーマとする作家の回顧展を開催したことの

衝撃は深い。ディン・Q・レの作品について、筆者は過去に博多の福岡アジア美術館における出品に接してはいたが、本展会場でようやく作品におけるヘリコプター＝兵器の恐怖をおぼろげながらも追体験するに至り、慄然とさせられた。

一方、島根県立美術館の「しまね画人伝 島根県立美術館コレクションを中心に展」（1月2日～2月15日）は、コレクション展プラス・アルファという域を超え、特別展並みの押し出しをもった構成で、「地元伝来」の作品を文脈に組み込んだものとして力強い。どこでもやっていることといえばそれまでもかもしれないが、こうした企画を繰り返すことが今こそ必要である。今や「地元」文化と住民の認識と関心の間には、大きな断絶が生じているからだ。ふたたび当方の例で恐縮だが、下関にお越しの機会があるなら、ぜひ街で「狩野芳崖って知っ

ていますか」と問うてみていただきたい。地域が生んだ偉人の筆頭に挙げられようかという人物さえ、知名度がこんなことになっているとは、と驚かれることだろう。

最後に話題を変えて、岡山県立美術館の「没後100年宮川香山 虫明焼と明治の陶芸展」（3月18日～5月8日）について。恥ずかしながら筆者は本展について、当初、サントリー美術館の「没後100年宮川香山展」（2月24日～4月17日）と同一のものと誤認していた。後者が巡回展ということもあってのことだが、両展覧会以外にも今年は各地で香山の展覧会が開催される。地域ゆかりの作家としてフォローしている対象が、他の地域でもほぼ時を同じくして展覧会化される。競合？関係がどのような成果を産むのか、地域間関係についての興味深い例である。



下関市立美術館「特別展示（研究報告）山口の八幡信仰—八幡縁起絵の創造と展開」会場風景



地域と美術の関わり方

古野華奈子 (ふるの かなこ・丸亀市猪熊弦一郎現代美術館)



ほとんどの美術館が、所在する地域とどう関わるか、という課題に常に向き合い、それぞれの状況下であれこれと試行錯誤しているであろう。当館も例にもれず「おらがまちの美術館」としての役割を探り続けている。一方で、美術館を介せずに地域住民が美術と関わる場面が増え、四国でもいろいろと見かけられるようになった。そんななか、この半年で印象に残ったものを紹介したい。

一つは、高知市の薬工ミュージアムで開催された展覧会「European Eyes on Japan / Japan Today vol.16 ―ヨーロッパの写真家が出会った高知一展」(2015年10月10日～11月8日)である。「European Eyes on Japan」とは、1999年よりEU・ジャパンフェスト日本委員会が行っている国際プロジェクトである。海外の眼を通して今の日本を記録し作品として後世に残す、という主旨のもと、毎年、ヨーロッパから気鋭の写真家を招聘し、1、2都道府県で1ヶ月ほどの滞在制作の後、日欧で成果展を開催している。美術を介した草の根の国際交流も意図しており、滞在地での世話役から日本での成果展までを、出来る限りその地域の住民に託すのがミソだ。2014年、高知にやってきた2人の写真家、スウェーデンのニナ・コルホネンと、ラトビアのアレキサンダー・グロンスキーの世話役を引き受けたのは「沢田マンションギャラリー room38」であった。

今や高知の名所となった、セルフビルドの賃貸集合住宅「沢田マンション(通称沢マン)」内にある「沢田マンションギャラリー room38」は、このマンシ

ョンの住民が開いた会員制の自主ギャラリーだ。所属作家たちが作品を発表する場であると同時に、講演会などのイベントも積極的に行っている。このギャラリーのメンバーが、「European Eyes on Japan」の招聘作家2人の滞在中にお世話し、翌年に主催者として展覧会を企画し、開催したのだ。会場は同ギャラリー以外の場所となっていた。つまり、自分たちの持ち場があるにもかかわらず、展示内容を踏まえて会場を別に設けたということだ。会場では、市民から公募した「私が一番好きな高知・高知の写真100人展」も同時開催されており、同ギャラリーでも北欧に関連したイベントを開催していた。つまり、会場探しから複数の関連イベントも含め、大掛かりな展覧会を作り上げたのだ。もちろん、EU・ジャパンフェスト側のゲストキュレーター、菊田樹子や、会場となった薬工ミュージアムの協力もあってのことだが、これだけの展覧会となったのは、やはり沢マンギャラリーメンバーの熱意の賜物であろう。

作家2人が滞在制作した作品は対照的で、コルホネンは高知の奥地へ分け入り、個性の強い田舎の人々とその生活環境をこつこつと撮っていた。一方のグロンスキーは、一貫して高知の市街地をスタイリッシュに撮影していた。しかしどちらも、つい笑ってしまうユーモアを含んでいて、作家それぞれの特性はもちろんあろうが、加えて、高知という土地が持つおおらかさと、彼らを迎え入れた沢マンギャラリーメンバーの影響もあったのではないかと思う。本展リリースで同ギャラリーは「地域社会と連携

し、若手アーティストの支援や芸術文化の発展に寄与するべく活動が続けている」と自己紹介している。美術館が掲げるようなこの言葉を、彼らは真摯に実行している。「地域社会と連携」においては、当館はすでに遅れをとっているかもしれない。そんな焦りの一方で、彼らのような地域住民を生み出す土壌として、また、支える立場として、美術館の必要性のようなものも見え、励まされる気がした。「European Eyes on Japan」は今年の滞在地を香川県とし、すでに2人の作家が滞在中を終えた。香川では、高松市内の小さな書店「BOOK MARÛTE」が受け皿となった。来年の展覧会が今から楽しみである。

香川県では今年、3度目の瀬戸内国際芸術祭が開催されている。春会期(3月20日～4月17日)会場の一つ、沙弥島は、今回で2度目の開催であるが、2度とも他の島と少し違った印象を持った。そこに集う人々に、地元の人の割合が多いように思うのだ。観覧者の間で讃岐弁が行き交い、地元の人が普段着で気軽に遊びに来た感が強い。受け入れ側も、市職員からなる事務局に加えて、ボランティアに、地元の中高生層が目立つ。もちろん、遠来のアートファンらしき人や若きボランティアもたくさんい

るのだが、どちらかと言えばいつもは美術と縁遠いような地域住民が、自分たちのイベントに集まって盛り上がっているように見えるのである。展示作品の一つ、蓮沼昌宏の《12島の物語回遊式アニメーション》は、瀬戸内の島それぞれについて物語をつくり、絵を描いて、パラパラマンガのような装置で見せるもので、特に人気を博していた。各島の灯台に見立てた台を一つ一つ巡り、大人も子供も屈託なくパラパラと装置をまわし、物語を追っている。ボランティアが嬉しそうにガイドしている。アートを介した地域住民の手による地域イベントが自然に成立しているように見えた。

昨年秋、香川県立ミュージアムで開催された「県展80周年記念展」(2015年10月10日～11月29日)によれば、1934年創立の香川県展は、全国の県主催の公募展のなかで最も長い歴史を誇るそうだ。香川県にはまだ美術館が無かった時代、県内の美術を育てたいと、当時東京で活躍していた香川出身の美術家たちが県知事へ直訴したことでスタートしたという。若き猪熊弦一郎もそのメンバーの1人だった。当館がそういう土壌の上に立つことを肝に銘じておかねばと思う。



薬工ミュージアム「European Eyes on Japan / Japan Today vol.16 展」会場風景

地域を見つめて

西村勇晴 (にしむら いさはる・北九州市立美術館)

2016年4月14日、震度7の地震が熊本地方を襲った。追い討ちをかけるように、同16日に同じ規模の地震に見舞われ、熊本、大分両県の被災地にさらなる被害をもたらした。この地震で亡くなった方、負傷された方も多く、また家屋倒壊の懸念から避難する人々も最多で18万人を超える災害であった。

この地震で熊本県立美術館や熊本市現代美術館などのように休館を余儀なくされた施設もあった(5月末までに両館とも再開した)。また地域の文化財が甚大な被害を受けた。熊本城、阿蘇神社楼門なども含め、数多くの史跡や建造物が倒壊、崩落したり、亀裂が生じたりしたのである。これらの復旧には非常に長い時間がかかると推測されており、美術館という場で同じく文化財と関わっている人間としても心が痛む。熊本、大分地方では現在でも余震は止まず、人々の不安も収まっていない。被災された方々に心からお見舞い申し上げるとともに、人々が一早く日常の生活を取り戻せるよう、速やかな復興を願っている。

さて、2015年10月から2016年4月までの九州ブロックの展覧会を報告しよう。それらにある共通した特徴が見られた。地域の文化財あるいは美術館の所蔵品、もしくは地域そのものを新たな視点から紹介している点である。

まず熊本県立美術館の「はとけの里と相良の名宝展」(2015年10月14日～11月29日)を挙げよう。昨年4月、人吉球磨地域が「日本遺産」に

指定されたことを記念して企画された。相良氏が鎌倉時代から明治時代まで治めた人吉球磨の歴史と仏教文化を紹介したものである。同地方に伝わる平安以降の仏教美術や相良氏の入部と拡大などが、丹念に歴史史料と関連づけながら示され、目を見張るような内容であった。美術館だけでなく近隣の大学、博物館との共同作業による展覧会であった点も特筆できる。今回の地震で被災した資料がないと思われるのは不幸中の幸いである。

大分県立美術館の開館記念展の第2弾として「神々の黄昏展」(2015年10月31日～1月24日)は「見えないものへの憧れ」としての「聖なるもののイメージ」を主題とした展覧会で、古今東西の時代、分野を超えた美術品が並ぶ意欲的な企画であった。ことに第2章の「物語を紡ぎ、再び生み出すこと 宇佐」では大分県北東部の宇佐・国東で始まった八幡信仰や神仏習合の歴史を同地域に伝わる資料によって古来の祈りの美として示した。また第3章は「女神たちの黄昏」と題し、グスタフ・クリムトの《ヌーダ・ヴェリタス》と奈良から平安前期の作とされる宇佐の《天福寺 木造菩薩立像》が時空を超えたヴィーナス像として並置された。

「川内倫子 川が私をうけいれてくれた展」(1月23日～3月27日 熊本市現代美術館)は2008年以来取材し続けた阿蘇山の野焼きを撮影した代表作のシリーズ《あめつち》を初めとする作品を集めた個展である。本展は事前に熊本市民から「あなたの熊本、わたしたちの時代」として大切にしてい

た風景やその記憶のエピソードを集め、それに刺激を受けた川内がその場所を訪れ撮影をした。最後の部屋には展覧会のサブタイトルの下に、撮り下ろした写真がエピソードからの言葉の抜粋とともに組み合わせられ展示され、体験はそれぞれ異なるが、川内によってまとめられた一つの詩になっていた。この展覧会を思い出しつつ、災害というものは被災者も含め熊本を体験した人々の記憶の中の大切な風景をも壊したかもしれないと、改めて感じていた。

コレクション研究が基になった企画がいくつか目についた。会員館ではないが長崎歴史文化博物館の「我が名は鶴亭展」(2月6日～3月27日)は長崎に生まれ、黄檗宗の聖福寺の僧となり、熊斐から南蘋風の花鳥画を学び、京都、大阪の絵画に新風をもたらした画家鶴亭(1722-1785)の大規模な回顧展であった。同館や共同開催をする神戸市立博物館の所蔵品や個人蔵の作品で構成され、あまり知ることが少なかった画家の全貌を示してくれた。東アジアとの交流の窓口としての長崎ならではの企画であったと言える。

福岡県立美術館の「没後40年 高島野十郎展」(2015年12月4日～1月31日)と福岡市美術館の「九州派展」(2015年10月28日～1月17日)は両館のこれまでの研究が基礎となっている。前者は同美術館が発見したと言える久留米出身の画

家の回顧展であった。代名詞になっている「蠟燭」の絵は月のシリーズとともに全体照明を落とした一室に集められた。それらはスポットライトで浮かび上がらせられ、壮観であった。

後者は戦後日本の美術史でも特異な位置を占める九州派の活動を、大半を所蔵品によって常設展の一角で紹介したものである。現存作品が少ないのが残念ではあるのだが、展示された写真資料などからは少なくとも活動の盛んであった1950年代末の福岡の美術界の熱気が伝わってきた。この展覧会にあわせて刊行された大部な『福岡市美術館叢書6 九州派大全』は貴重な美術資料である。

北九州市立美術館は昨年からの改修工事のために本館は閉館し、小倉北区の分館だけの活動になっている。2015年11月14日から12月13日まで開催した「樹のいのち 画家のまなざし展」は所蔵品だけで構成した。身近な樹木が画家の手によって擬人化、神格化、あるいは抽象化された作品を選び、その意義を探った展覧会であった。

美術館のコレクションも含め地域の文化財は地域の人々の心の拠り所となるものである。世界的な経済不振などから社会の先行きが不透明な現今、美術館活動としてそれらを地道に紹介してゆく仕事はこれからますます重ねていかなければと、近年多く続いた上にさらに生じた災害のあとだけに、ことさらのように思うのである。



熊本市現代美術館「川内倫子 川が私をうけいれてくれた展」会場風景

岐阜現代美術館

〒 501-3939 岐阜県関市桃紅大地 1 番地



TEL: 0575-23-1210
FAX: 0575-23-1218
E-mail: info@gi-co-ma.or.jp

〔開館時間〕
午前 9 時から午後 4 時 30 分まで
(入館は午後 4 時まで)

〔休館日〕
第 2, 4 土曜日、日曜日、祝祭日 (イベントにより臨時休館あり)

〔開館時期〕
2007 年 9 月 9 日

岐阜県関市の南東部、美術家篠田桃紅にちなんだ地名「桃紅大地」に、岐阜現代美術館はある。公益財団法人岐阜現代美術財団が運営する当館は、高校や大学が隣接する地域の緑豊かな小高い丘の上に、「岐阜の文化発展の一助となることを念願し」2007 年に開館した。ユニークな円形ドームの美術館建物は、大野秀敏氏の設計により、1992 年、鍋屋バイテック会社関工園内に建てられ、1993 年度の「日経ニューオフィス推進賞」および「中部建築賞」を受賞している。ロゴマークは矢萩喜徳郎氏による。

当館は、篠田桃紅の初期から新作まで 800 余点の作品と関連資料を所蔵している。これらはコレクションの柱となっているだけでなく、国内にある篠田桃紅の作品として、時代、数の点からも充実したものとなりつつある。とくに 1950～60 年代の作品群は、桃紅が書から抽象へと移行し、独自の表現スタイルを確立する過程を知ることができる貴重なもので、当館コレクションの代表的な位置づけとなる作品である。このほかに、戦後の前

衛芸術運動に関わり、後にニューヨークに渡った荒川修作の作品を約 100 点所蔵している。

展覧会は、桃紅の墨の独自の世界を多角的に紹介する展示のほかに、地元岐阜ゆかりの現代美術作家を紹介する展示を合わせ、年間 4～5 回開催している。また、母体財団が管理・運営を受託する、関市立篠田桃紅美術空間と協同し、「篠田桃紅芸術月間」と題して毎年 1～3 月の 3 ヶ月、大規模な企画展を開催している。2013 年には、桃紅が 100 歳を迎えたのを記念し、県内美術館および画廊を含めた 4 会場で回顧展を協同企画、開催した。

そのほか、音楽と絵画の融合を図り、作品展示と同時に国内外の著名な音楽家を招聘しコンサートを開催している。また、教育普及活動として展覧会に関連したワークショップやギャラリートークを行っている。

今後も、これらの活動をおして、地域の芸術文化の発展に寄与し、広く芸術の情報発信の場となるよう努めていきたい。

(宮崎香里・みやざき かおり)

中村屋サロン美術館

〒 160-0022 東京都新宿区新宿三丁目 26-13 新宿中村屋ビル 3 階



TEL: 03-5362-7509
FAX: 同上
E-mail: museum@nakamuraya.co.jp

〔開館時間〕
午前 10 時 30 分から午後 7 時まで
(入館は午後 6 時 40 分まで)

〔休館日〕
火曜日 (休日の場合は翌日)、展示替期間、年末年始

〔開館時期〕
2014 年 10 月 29 日

中村屋サロン美術館は、東京・新宿駅東口から徒歩 2 分、新宿通りに面し、地下道からも直結している好立地の美術館である。

運営母体は菓子・食品メーカーの株式会社中村屋で、同社の本店ビル建て替えを機に、2014 年 10 月 29 日に開館した。

明治末から昭和初期にかけて、中村屋の創業者相馬愛蔵・黒光夫妻の支援のもと、新宿の店には彫刻家の荻原守衛(碌山)や画家の中村彝、書家・美術史家の會津八一など、多くの芸術家、文化人たちがつどった。中村屋で若い芸術家たちが互いに切磋琢磨し、才能を開花させていったその様子は、後に「中村屋サロン」と称され、日本近代美術史にその名を残している。当館は彼らがつどったまさにその場所から、中村屋サロンの芸術家たちの作品を中心に日本近代美術を紹介するとともに、新宿という立地を生かし、広く芸術・文化の振興につながるような企画も実施していく。

場所は新宿中村屋ビルの 3 階で、延べ床面積は約 240㎡と非常に小さな施設であるが、可動式パーテーションを備えた展示室と、11m の展示ケースが

ある展示室から成る。

収蔵品は約 250 点。代表作は中村彝《少女》で、本作品は創業者夫妻の長女俊子をモデルに、当時、中村屋の裏にあったアトリエで描かれた作品である。彝の作品は他にデッサン、パステル画等を含め 8 点ある。また荻原守衛(碌山)《女》は、モデルは別にいたが、相馬黒光を心のモチーフに作られたと言われており、こちらもゆかりが深い。その他、中村屋サロン関係では高村光太郎の自画像や會津八一の書などを所蔵している。

展示は年 2 回の企画展と、コレクションを中心とした通常展示を行っている。企画展は日本近代美術の紹介を目的に、中村屋サロンに集った芸術家の一人やその時代にスポットを当てた展示が中心となっている。また、新宿区との連携による展示や、中村屋サロンの芸術家たちに関連する施設との協働も図っている。

小さな美術館であるが、相馬愛蔵・黒光が実践した芸術・文化支援から生まれたものを伝えるとともに、この場所で新たな芸術・文化支援を行ってきたい。新宿という立地を生かし、多くの人々がつどい、気軽に芸術・文化に親しめる場、まさにサロンのような場所を目指している。

(河野奈美江・こうの なみえ)

堺 アルフォンス・ミュシャ館 (堺市立文化館)

〒 590-0014 大阪府堺市堺区田出井町 1-2-200 ベルマージュ堺式番館



TEL: 072-222-5533
FAX: 072-222-6833
E-mail: mucha@sakai-bunshin.com

〔開館時間〕
午前 9 時 30 分から午後 5 時 15 分まで
(入館は午後 4 時 30 分まで)

〔休館日〕
月曜日(休日の場合は開館)、休日の翌日(翌日が土・日・
休日の場合は開館)、年末年始、展示替期間、設備改
修工事(2017 年 2 月 6 日～ 6 月 30 日)

〔開館時期〕
2000 年 4 月 7 日

堺 アルフォンス・ミュシャ館は、1994 年に年間を通してアルフォンス・ミュシャの作品を企画展示する専門美術館としてポルタス堺センタービルに「アルフォンス・ミュシャギャラリー」の名称で開館した。その後 2000 年からはより充実した展示を行うため JR「堺市」駅前に開館した堺市立文化館へ移設。そして 2015 年には、併設する「与謝野晶子文芸館」の移設に伴い新たに展示室を拡充のうえ、リニューアルオープンした。

堺 アルフォンス・ミュシャ館は堺市駅前の再開発を目的として誕生した複合施設〈ベルマージュ堺〉の一角にあり、地上 43 階建てのタワーマンションの 2 ～ 4 階に位置する。3 階と 4 階にそれぞれ展示室を持ち、その他展示や市民ギャラリーに利用できる展示室が 4 室ある。また、運営については公益財団法人堺市文化振興財団が指定管理者となり管理・運営を行っている。

アルフォンス・ミュシャ (1860-1939) は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて花開いたアール・ヌーヴォーの代表的な芸術家である。現在のチェコ共和国で生まれたミュシャは、パリの舞台女優サラ・ベルナールのポスターを制作して一躍有名になった。

「どうして堺市にミュシャが？」これは日ごろ多くの方々からいただく質問である。堺市はミュシャの作品を多く所蔵している政令都市であり、これは日本唯

一に迫る規模である。堺市が所蔵しているミュシャと関連作家の作品約 500 点は、株式会社ドイの創業者である土居君雄氏 (1926-90) が収集したドイ・コレクションを前身としている。

土居氏は生前、ミュシャの実息イジー・ミュシャ氏と公私にわたり親交を育み、ミュシャの祖国チェコでもみることが出来ない貴重な大型の油彩画や素描などを加えた、体系的なコレクション形成に尽力した。土居夫妻が新婚時代を過ごしていた思い出の地が堺市であったため、土居氏の没後にドイ・コレクションを堺市に寄贈、一部市が購入した経緯がある。

コレクションの特徴は、ミュシャの代表的なポスターや装飾パネルだけでなく、油彩画や素描、彫刻や宝飾品などから構成される作品群である。多彩な作品によって生涯さまざまな地で活躍したミュシャの初期から晩期に至るまでのあらゆる創作活動を、年 3 回のコレクション展によって多角的に紹介している。

当館は小規模ながら国内唯一のアルフォンス・ミュシャ専門の美術館であり、理念として掲げるのは、体系的なコレクションを通して多彩なミュシャの活動を広く発信していくことである。展覧会や活動を通して堺市の芸術文化発展に寄与していくとともに、今後は地域の人々も気軽にミュシャと出会える環境づくりを目指していきたい。

(西川奈津美・にしかわなつみ)

堺にミュシャがあります

はつかいち美術ギャラリー

〒 738-0023 広島県廿日市市下平良 1-11-1



TEL: 0829-20-0222
FAX: 0829-31-5108
E-mail: gallery@hatsukaichi-csa.net

〔開館時間〕
午前 10 時から午後 6 時まで
(入館は午後 5 時 30 分まで)

〔休館日〕
月曜日(祝休日の場合は直後の平日)、
年末年始(12 月 29 日～ 1 月 3 日)、展示替期間

〔開館時期〕
1997 年 4 月 25 日

はつかいち美術ギャラリーは、世界文化遺産・厳島神社の宮島を擁する広島県廿日市市に所在している。1997 年 4 月、廿日市市役所庁舎に併設した複合施設「はつかいち文化センター」内に、文化ホールさくらびあ・市民図書館とともに開館して今年で 20 年目となる。施設の概要は、文化センター 2 階建ての 2 階部分に位置し、延床面積は 598㎡、展示室は第 1 展示室 77㎡、第 2 展示室 94㎡、第 3 展示室 170㎡の計 341㎡となっている。設置者は廿日市市、運営は財団法人廿日市市文化スポーツ振興事業団が受託管理し、2006 年 4 月からは指定管理者となり、2012 年 4 月には公益認定を受けている。収蔵作品は、廿日市市出身で明治期にアメリカ・フランスで学んだ洋画家・小林千古(1870-1911)の作品など、郷土ゆかりの作家の作品を中心に約 350 点を収蔵している。

企画展としては、廿日市市で創作活動を行う郷土作家の紹介や、被爆地広島にある市として開館以来毎年 8 月に開催を続けている美術作品を通して平和を考える「平和美術展」、同市内に所在するウッドワン美術館収蔵品作品展、子どもから大人まで一緒に楽しめる絵本原画展、陶磁器を中心とした全国巡回展など、さまざまな分野の展覧会を年間 7 ～ 8 回開催している。広島市立大学芸術学部のほ

か廿日市市美術協会・廿日市市文化協会などの地域団体とも連携した事業を展開。展覧会ごとに趣向を凝らした、ワークショップ、講演会、ギャラリートーク、学校へのアウトリーチなど、より展示内容に理解が深まるような関連事業を数多く企画し、文化芸術活動の普及に努めている。また、併設した音楽ホールとの連携で音楽と絵画を融合させたワークショップの開催や展示室内で行う併設図書館の司書による絵本のよみきかせも、施設の特性を活かした企画として好評である。

企画展以外の期間について 3 つの展示室を地域のグループや個人の作品の発表の場として利用できる貸ギャラリーとして貸出している。

市の中心となるシビックコアに位置し、美術を身近に楽しめる「まちの小さな美術館」として親しまれてきたが、近年近隣に大型ショッピングセンターが開業したことによりますます人通りも多くなり、より充実した企画運営が求められるところである。

全国美術館会議においては、特に小規模館研究部会に所属し、情報の共有や相互協力のためのネットワークづくりを行っていき、会員として研修・研究を重ねることにより、展覧会や館運営での一層の充実を図って参りたい。

(山田博規・やまだひろき)

田中一村記念美術館

〒 894-0504 鹿児島県奄美市笠利町節田 1834



TEL: 0997-55-2635
FAX: 0997-55-2613
E-mail: jimmu-07@amamipark.com

〔開館時間〕

午前 9 時～午後 6 時まで
(7・8 月は午前 9 時～午後 7 時まで)
(入館は閉館 30 分前まで)

〔休館日〕

毎月第 1・3 水曜日(祝日の場合は翌日)(ただし、4 月 29 日～5 月 5 日、7 月 21 日～8 月 31 日、12 月 30 日～1 月 3 日は開館)

〔開館時期〕

2001 年 9 月 30 日

田中一村記念美術館は、2001 年、鹿児島県奄美大島に開館した。奄美の自然に魅せられ、大島紬の染色工として働きながら、緻密な筆致で驚くべき美の世界を築き上げた画家・田中一村(1908-77)のコレクションを常設で展示する美術館である。その他、奄美にちなんだ企画展等も開催している。

隣接する「奄美の郷」(奄美の美しい自然や多様な文化、歴史などをビジュアルで紹介するとともに、人々の交流の場となっている)とともに奄美群島の観光拠点施設「鹿児島県奄美パーク」を構成する。

空港から自動車で 5 分。奄美の海をイメージした池に 3 棟の高倉が並ぶ設計が南国ムードを高める。美術館の周囲には、一村が作品のモチーフにしたアダン、ソテツ、ガジュマル、ハマユウなど様々な亜熱帯の植物で構成される「一村の杜」があり、一村が描いた鳥や蝶などに遭遇することもある。一村の作品に触れることで周囲の景色も新たな印象をもたらしてくれる。また、奄美の空気を感じながら見る一村の作品は一つ一つが強烈に心に響く。

当館では、軸、額、色紙作品、スケッチブック、素描、資料等約 460 点を蔵している。その中から、約 80 点の田中一村作品を常時展示し、年 4 回の展示替えを行っている。一村の生涯にわたる作品を年代別鑑賞していただけるように住んでいた場所ごとに常

設展示室、特別展示室に展示している。

〈東京時代〉幼くして画才を発揮し神童と呼ばれた頃の色紙や米邨と名乗っていた頃の南画の作品。《蛤図》、《水辺にめだかと枯蓮と露の臺》など

〈千葉時代〉30 歳で千葉に移り住み、身近な自然を観察して描いた風景画や花鳥画の作品、47 歳で九州・四国・紀州を旅して描いた色紙等。《白い花》、《秋晴》など

〈奄美時代〉奄美の自然を描き、一村芸術が花開いた数々の作品。奄美群島や近隣の島々の自然を卓越した視点で描いた色紙や畳大の大作の数々、「閻魔大王へのお土産…」と一村が語った《不喰芋と蘇鐵》など

企画展示室では、奄美の自然、風物、文化をテーマとする作品の全国公募展「奄美を描く美術展」や奄美関連作家展、小中学校図工美術学習発表展、スケッチコンクール作品展、ワークショップ、創作体験教室など「奄美からの発信」「奄美への発信」をテーマとした事業が開催されてきている。

常設展示室、特別展示室、企画展示室の他にガイダンス室、図書資料室、喫茶、ミュージアムショップも備えている。今後も五感で田中一村を堪能できる空間を充実させていきたい。

(花山潤治・はなやま じゅんじ)

新居浜市美術館
(あかがねミュージアム 2 階)

〒 792-0812 愛媛県新居浜市坂井町 2-8-1



TEL: 0897-65-3580
FAX: 0897-65-3581
E-mail: sougojunbi@city.niihama.chime.jp

〔開館時間〕

午前 9 時 30 分から午後 5 時まで
(入館は午後 4 時 30 分まで)

〔休館日〕

月曜日(祝日の場合は翌平日)、12 月 29 日～1 月 1 日
展示替期間

〔開館時期〕

2015 年 7 月 18 日

新居浜市美術館は、「創る」「学ぶ」「育む」のコンセプトのもと、2015 年 7 月 18 日に JR 新居浜駅前にオープンした新居浜市総合文化施設との複合施設(あかがねミュージアム)の 2 階フロアに位置し 3 つの展示室で構成されている。

展示室 1 では、主に企画展を開催する。当館独自の企画展や他館と協力する巡回展の開催である。

展示室 2 は、常設展示室となっているが、企画展「新居浜の美術 昨日・今日・明日」シリーズとして新居浜ゆかりの作家や所蔵作品の紹介もしている。市民ギャラリーは、公募展の開催や、市民を中心に一般に貸出し、作品の発表の場として使用する展示室となっている。その広さは 3 室合わせて、1,000㎡になる。

収蔵作品は、新居浜市立郷土美術館(2016 年 3 月閉館)の収蔵品を引き継ぎ、加えて黒田清輝、小磯良平、中村琢二、真鍋博等新居浜ゆかりの作家の作品を中心に収蔵している。今後は、デザイン、写真、映像他の新たな表現領域の作品についても積極的に収集をすすめるとともに、新居浜文化を特徴づける作品及び資料、新居浜の近現代の動向に影響を与えた国内外の美術作品等

も収集の対象とする。

併設の総合文化施設では、太鼓台ミュージアムにて新居浜太鼓祭りで実際に運行している現役の太鼓台を順番に展示するとともに、隣接するシアターでは、360 度のスクリーンに映し出される迫力ある映像と音響で太鼓祭りが体感できる。他にも、新居浜の文化や歴史をテーマに沿って紹介するにいはまギャラリー、創作活動の場としてアート工房、国内外から様々なジャンルの講師を招聘し、ワークショップを開催したり、定期的に講座を開催する創作スペース。ここでは種類豊富な道具や素材を用意し、多くの創作活動に対応できるよう備えている。特に美術館には珍しい鉱物関係のワークショップで使用する粉碎器や顕微鏡がある。

また、演劇や音楽活動の場としては地下に多目的ホール(250 席)やドラムセット、ギターアンプ、マイク等の実演可能な楽器類を備えているスタジオ、そして軽食の取れるカフェ等様々な世代の人々が集い、楽しめる施設となっている。

まもなく開館 1 周年を迎えるが、今後も新たな文化創造拠点として多種多様な芸術文化を広く発信していきたい。(鎌田真実・かまだ まみ)

ZENBI [Vol.1-10] 総目次

[全美フォーラム]	号・頁
〈Vol.1〉	
江上ゆか 歴史資料ネットワークについて	01・F-01
高橋瑞木 あの時の水戸芸術館、いま、そしてこれから	01・F-04
稲庭彩和子 ケアの場としての美術館―認知症の方のためのプログラム	
	01・F-06
池上司 もって野生を 「榎忠展 美術館を野生化する」	01・F-10
逢坂恵理子 ヨコハマトリエンナーレ 2011 を巡って	01・F-13
〈Vol.2〉	
酒井哲朗 博物館法検討委員会中間報告「美術館基準（案）」の顔末	02・F-02
安田篤生 「博物館倫理規程に関する調査研究報告書」についての報告	02・F-04
山内宏泰 「東日本大震災発生から、一年を振り返る」	02・F-07
田中善明 陸前高田市立広田中学校で被災した4点の作品	02・F-10
大島徹也 ブロック展を終えて「生誕100年 ジャクソン・ポロック展」	02・F-12
成相肇 「的世界」で考えたこと	02・F-15
平井章一 「地方」の光と影 「坪内兎幸展―追いかめた『具体』」	02・F-17
岡部卓 個人美術館としての活動の広がり	
一木田金治郎美術館と「北海道銀行コレクション」	02・F-20
〈Vol.3〉	
貝塚健 サステナビリティのゆけえ	03・F-01
一條彰子 「博物館における青少年教育」ドイツ派遣事業に参加して	03・F-04
黒田雷児 アジア交流雑感	03・F-08
市川政憲 二年後。自然と芸術、そしてレクイエム	03・F-11
白原由起子 日本美術を海外に紹介する	
一より良い英訳を作成するためのヒント	03・F-15
中野仁詞 空間芸術と時間芸術の横断プロジェクト「アート・コンプレックス」	03・F-18
〈Vol.4〉	
泰井良 静岡県立美術館の評価 10年を振り返って	04・F-03
水谷長志 日本の美術文献の発信と伝達―国立美術館の artlibraries.net 参画の意味を思う	04・F-06
鴨木年泰 所蔵作品情報のデジタル化と発信	
情報・資料研究部会の20年間の活動から見える課題と展望	04・F-09
光田由里 戦後美術のダイアグラム	
A New Avant-Garde Tokyo 1955-1970 展に寄せて	04・F-13
〈Vol.5〉	
毛利義嗣 瀬戸内アートエレジー	05・F-01
川浪千鶴 石元泰博コレクションと石元泰博フォトセンターのこれから	05・F-04
小林牧 東京国立博物館のSNS	05・F-07

〈Vol.6〉	
山梨俊夫 「美術館関係者の行動基準」とは?	06・F-01
大嶋貴明 「美術館基準（案）」彼方で	06・F-03
安田篤生 ICOM（国際博物館会議）2019年大会の京都招致について	
	06・F-08
堀宜雄 備忘三年	06・F-11
大島徹也 コレクションはいま	06・F-15
塚田美紀 言葉を磨いて外へ	
―イギリスのミュージアム・エデュケーションの現在	06・F-19
〈Vol.7〉	
吉崎元章 札幌国際芸術祭 2014	07・F-02
戴前知子 東京都現代美術館「MOT コレクション」の試み	07・F-04
長屋菜津子 文化財の保存分野に IPM プログラムが導入されてきた背景	07・F-07
塚本鷹充 故宮文物を如何に展示するか	
―北京と台北、二つの故宮展	07・F-11
〈Vol.8〉	
雪山行二 岐路に立つ美術館補償制度	08・F-02
谷新 制度の有効活用のために―美術館補償制度について	08・F-04
土屋隆英 「美術館補償制度」に思う	08・F-07
能勢陽子 美術館における「表現の自由」とはなにか	
―愛知県美術館「これからの写真」展における検閲問題をめぐって	08・F-10
住友文彦 学芸員の仕事から考える美術館のあり方	08・F-13
片岡真実 CIMAM（国際美術館会議）年次総会、21年ぶりの日本開催	08・F-16
長山美緒 変わるための一歩	
英国ターナー・コンテンツボラリーのエデュケーターを迎えて	08・F-19
〈Vol.9〉	
水沢勉 「かまきん」の終焉	09・F-02
貝塚健 リニューアルを迎えるブリヂストン美術館	09・F-05
中尾智路 尊い日常からの逸脱と回帰	
―第5回アジア美術トリエンナーレ 2014 を終えて	09・F-08
木村絵理子 横浜トリエンナーレの役割と横浜美術館	09・F-11
〈Vol.10〉	
岩崎奈帆子 「箱根の自然と美術の共生」をめざして―箱根・大涌谷の噴火	
警戒レベル上昇にともなうポーラ美術館の取り組み	10・F-02
小川純子 現代美術の修復に備える―シンポジウム「過去の現在の未来 アーティスト、学芸員、研究者が考える現代美術の保存と修復」報告	10・F-05
相澤邦彦 美術館と次世代型照明システムについて	10・F-07
三輪健仁 「同一性」をめぐる二つの展覧会と、「出来事の記録」について	10・F-11
水谷長志 コレクションのメタデータにおける「真正性」の担保と公開は相克するのがあるいはコレクション情報は誰のためのものなのか	10・F-14

[ブロック報告]	号・頁
〈北海道ブロック〉	
街全体を舞台にした展覧会と作家の連携 吉崎元章（札幌芸術の森美術館）	01・19
北海道の美術館文化 岩崎直人（札幌芸術の森美術館）	02・03
北海道から―小規模館から見た動静 菅訓章（神田日勝記念美術館）	03・02
寒くても、遠くても	
井内佳津恵（北海道立文学館 / 前北海道立旭川美術館）	04・02
美術博物館の自覚と矜持 中村聖司（北海道立近代美術館）	05・02
冬ニモ負ケズ一字芸員のネットワーク	
地家光二（北海道立三岸好太郎美術館）	06・02
美術とコミュニティーのあり方を思う	
久米淳之（北海道立函館美術館）	07・02
子どもをめぐる展覧会の試み 星田七重（市立小樽美術館）	08・02
「北海道150年」を前に 大下智一（北海道立函館美術館）	09・02
巡回展の醍醐味 土岐美由紀（北海道立旭川美術館）	10・02
〈東北ブロック〉	
福島からの報告 荒木康子（福島県立美術館）	01・21
被災地から―震災復興支援展あれこれ 三上満良（宮城県美術館）	02・05
被災地の美術館と美術館家、その後 大野正勝（岩手県立美術館）	03・04
震災を機に考える 岡部信幸（山形美術館）	04・04
青森にて芸術祭の機運 飯田高誉（青森県立美術館）	05・04
震災から3年 佐藤秀彦（郡山市立美術館）	06・04
場所を継ぐ 原田久美子（秋田県立美術館）	07・04
新規加盟館のコレクション展から、全国美術館会議への期待を読む	
伊藤匡（福島県立美術館）	08・04
路の奥で何と出会うか―東北のアート・プロジェクトに思う	
齋藤桃子（岩手町立石神の丘美術館）	09・04
今、この場所から―震災復興とミュージアム	
奈良香（秋田県立近代美術館）	10・04
〈関東ブロック〉	
美術館の存在意味を問われる―3・11以後、2011年春夏の美術館活動について	
小勝禮子（栃木県立美術館）	01・23
第二世代美術館の行方、など 前山裕司（埼玉県立近代美術館）	02・07
美術館の初心 関東ブロックから	
水沢勉（神奈川県立近代美術館）	03・06
前衛回顧と資料展示 地域性の視点から	
水沼啓和（千葉県美術館）	04・06
展覧会における人、資料、作品 中村尚明（横浜美術館）	05・06
足元を見つめて	
染谷滋（富岡市立美術館博物館 福沢一郎記念美術館）	06・06
遊びと美術館 小泉淳一（茨城県近代美術館）	07・06
美術館の来し方行く末 浅井俊裕（水戸芸術館現代美術センター）	08・06
各美術館の研究成果を発表し、美術館の個性を磨く活動に期待する	
松山由里（群馬県立近代美術館）	09・06
新しい尺度 江尻潔（足利市立美術館）	10・06
〈東京ブロック〉	
善戦・苦戦・奮戦―2011年度前半の展覧会を振り返って	
松本透（東京国立近代美術館）	01・25
東京：震災の余波は続く 近藤建一（森美術館）	02・09

再生・ボーダレス・初 保坂健二朗（東京国立近代美術館）	03・08
季節の変わり目 橋本善八（世田谷美術館）	04・08
「空想の美術館」を超えて 戴前知子（東京都現代美術館）	05・08
「レガシー」を見据えて―2020東京オリンピック文化プログラム	
岡部友子（東京都庭園美術館）	06・08
「エンナーレ」の時代と東京オリンピック	
富田章（東京ステーションギャラリー）	07・08
やっぱり見て飽きない作品が重要だ！ 山村仁志（府中市美術館）	08・08
東京で見えてきたいくつかのこと 遠藤望（世田谷美術館）	09・08
次のさらなるステージへ―美術館をとりまくさまざまな変化	
降旗千賀子（目黒区美術館）	10・08
〈北信越ブロック〉	
常設展の魅力度アップ事業と近隣美術館との連携	
杉野秀樹（富山県立近代美術館）	01・27
目の前を行き来する潜在的鑑賞者たち	
二木伸一郎（石川県立美術館）	02・11
巡回展に思う―走るアート・クサマヤヨイ《水玉乱舞》号の底力	
不動美章（金沢21世紀美術館）	03・10
冬美術館 藤田裕彦（新潟県立近代美術館）	04・10
移動とネットワーク 芦川貞夫（福井県立美術館）	05・10
30年後の第二次美術館建設ラッシュ 橋本文良（高岡市美術館）	06・10
今日の美術館事情 横山秀樹（新潟市新津美術館）	07・10
北陸新幹線開業元年、にぎわいと活気のなかで	
浅地豊（富山県水墨美術館）	08・10
日本の美は北陸にあり!? 二木裕子（小松市立宮本三郎美術館）	09・10
聞こえ、思いつくまに 松久国憲（新潟県立近代美術館）	10・10
〈東海ブロック〉	
国際展とその傍らで 天野一夫（豊田市美術館）	01・29
コレクション展に見る時代の気分 川谷承子（静岡県立美術館）	02・13
展覧会（特別展）の傾向から見えてくるもの	
山田諭（名古屋市美術館）	03・12
コレクションによる展覧会30周年記念展など	
村田真宏（愛知県美術館）	04・12
つれづれに思うこと 毛利伊知郎（三重県立美術館）	05・12
作品の最適化をはかる 中村史子（愛知県美術館）	06・12
写真の展示と展覧会―受容のいま	
正村美里（岐阜県現代陶芸美術館）	07・12
少女は強くなったか？ 以倉新（静岡市美術館）	08・12
思いのままに、展覧会をそぞろ歩き 坪井則子（佐野美術館）	09・12
美術館の位置づけ―ある数字から	
高橋秀治（岐阜県現代陶芸美術館）	10・12
〈近畿ブロック〉	
関西の美術（館）事情	
菅谷富夫（大阪市立近代美術館建設準備室）	01・31
関西の美術館の連携について 島敦彦（国立国際美術館）	02・15
近畿圏、近年の動向から 奥村泰彦（和歌山県立近代美術館）	03・14
関西の美術館の連携について 出原均（兵庫県立美術館）	04・14
工芸の展覧会について 出川哲朗（大阪市立東洋陶磁美術館）	05・14
現代美術コレクションの保存／美術館の未来	
牧口千夏（京都国立近代美術館）	06・14

所感を織り交せて 篠雅廣（大阪市立美術館）	07・14
「展示の環境」と「解説パネル」について	
南城守（奈良県立美術館）	08・14
コレクション展に思う 岸野裕人（姫路市立美術館）	09・14
技術の噴賞と評価の再点検 岡泰正（神戸市立小磯記念美術館）	10・14
〈中国ブロック〉	
広島から発信する、オノ・ヨーコの新作メッセージ	
神谷幸江（広島市現代美術館）	01・33
知恵を絞って 柳沢秀行（大原美術館）	02・17
地域の文化資源と結びつく美術館 前田淳子（山口県立美術館）	03・16
「らしさ」の現在 椋木賢治（鳥根県立石見美術館）	04・16
岡山的美術界―アートイベント花盛り	
上蘭四郎（笠岡市立竹斎美術館）	05・16
「美術」をはぐしていく美術 三浦努（鳥取県立博物館）	06・16
2014 年秋・島根彫刻めぐり 川西由里（島根県立石見美術館）	07・16
巡回展は中国地方を駆けめぐる	
高嶋雄一郎（神奈川県立近代美術館／元岡山県立美術館）	08・16
被爆 70 周年事業と上半期の活動 福永治（広島市現代美術館）	09・16
地域のテーマは活路となるか―あらためての問い	
岡本正康（下関市立美術館）	10・16
〈四国ブロック〉	
芸術祭以後の四国・瀬戸内	
中田耕市（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）	01・35
四国四県的美術館動向 松本教仁（高知県立美術館）	02・19
高松、丸亀、久万、そして徳島 吉川神津夫（徳島県立近代美術館）	03・18
ふたつの祭り―地域とアート 神内有理（町立久万美術館）	04・18
「瀬戸内国際芸術祭」と「大塚国際美術館」の現状報告	
安東七瀬（大塚国際美術館）	05・18
リエゾンとしてのアート―四国こどもとおとなの医療センターをたずねて	
牧野裕二（高松市美術館）	06・18
四国的美術館概況 松村円（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）	07・18
だれのための美術館なのか―美術でつながる地域社会	
東浦博史（相生森林美術館）	08・18
コレクション展のあれこれと、これから	
太田恵美子（高知県立美術館）	09・18
地域と美術の関わり方	
古野華奈子（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）	10・18
〈九州ブロック〉	
面的な情報発信は可能か？―連携進む九州の美術館	
山口洋三（福岡市美術館）	01・37
美術館の原点へ／拡張する美術館―九州の活動から	
坂本颯子（熊本市現代美術館）	02・21
地域の現代美術祭との連携による美術館の活性化	
菅章（大分市美術館）	03・20
まねのできない気合いと気概 野中明（長崎県美術館）	04・20
それぞれの戦後、回顧して何を思う 那須孝幸（北九州市立美術館）	05・20
変わらずに在るために変わってゆくこと、風を呼ぶこと 竹口浩司（福岡県立美術館）	06・20
九州地区の動き 園田博一（宮崎県立美術館）	07・20
地方でアートに向かって 植松篤（鹿児島県霧島アートの森）	08・20
戦争と近代、そしてリニューアル 秋山沙也子（佐賀県立美術館）	09・20
地域を見つめて 西村勇晴（北九州市立美術館）	10・20

〔部会報告〕	号・頁
〈保存研究部会〉	
伊藤由美（神奈川県立近代美術館）	01・12
伊藤由美（神奈川県立近代美術館）	03・22
根本亮子（岩手県立美術館）	05・22
相澤邦彦（兵庫県立美術館）	07・22
根本亮子（岩手県立美術館）	09・22
〈教育普及研究部会〉	
鬼本佳代子（大原美術館）	01・13
前田淳子（山口県立美術館）	03・23
清家三智（名古屋市長美術館）	05・23
遊免寛子（兵庫県立美術館）	07・23
清家三智（名古屋市長美術館）	09・23
〈情報・資料研究部会〉	
鴨本年泰（東京富士美術館）	01・14
川口雅子（国立西洋美術館）	03・24
川口雅子（国立西洋美術館）	05・24
川口雅子（国立西洋美術館）	07・24
鴨本年泰（東京富士美術館）	09・24

〈小規模館研究部会〉	
渡辺浩美（高梁市成羽美術館）	01・15
坪井則子（佐野美術館）	03・25
宮崎徹（鎌倉市鐔木清方記念美術館）	05・25
横山由美子（浜田市立石正美術館）	07・25
喜田早葉江（清須市はるひ美術館）	09・25

〈ホームページ部会（1号ではホームページ運営研究部会）〉	
宮武弘（福島県立美術館）	01・16
宮武弘（福島県立美術館）	03・26
宮武弘（福島県立美術館）	05・26
宮武弘（福島県立美術館）	07・26
宮武弘（福島県立美術館）	09・26

〈機関誌部会（1号では全国美術館会議ニュース研究部会）〉	
尾崎信一郎（鳥取県立博物館）	01・17
尾崎信一郎（鳥取県立博物館）	03・27
尾崎信一郎（鳥取県立博物館）	05・27
尾崎信一郎（鳥取県立博物館）	07・27
尾崎信一郎（鳥取県立博物館）	09・27

〈美術館運営制度研究部会〉	
河崎晃一（兵庫県立美術館）	01・18
山梨俊夫（国立国際美術館）	03・28
大島徹也（愛知県美術館）	05・28
大島徹也（愛知県美術館）	07・28
貝塚健（石橋財団ブリダストン美術館）	09・28

〈地域美術研究部会〉	
山田諭（名古屋市長美術館）	07・29
山田諭（名古屋市長美術館）	09・29

〔新規会員館紹介〕	号・頁
七戸町立鷹山宇一記念美術館	01・39
（公財）ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館	01・40
中村研一記念 小金井市立はげの森美術館	01・41
佐久市川村吾蔵記念館	01・42
松本市美術館	01・43
清須市はるひ美術館	01・44
一関市博物館	02・23
新潟市新津美術館	02・24
海に見える杜美術館	02・25
小杉放庵記念日光美術館	04・22
アーツ前橋	04・23
馬の博物館	04・24
実践女子学園香雪記念資料館	04・25
軽井沢ニューアートミュージアム	04・26
山ノ内町立 志賀高原ロマン美術館	04・27
高浜市やきものの里かわら美術館	04・28
文化フォーラム春日井	04・29
ヤマザキマザック美術館	04・30
九州国立博物館	04・31
福島美術館	06・22
愛知県陶磁美術館	06・23
上田市立美術館	06・24
富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館	06・25
林原美術館	06・26
CCGA 現代グラフィックアートセンター	06・27
小林古径記念美術館	06・28
あべのハルカス美術館	06・29
（一財）藤城清治美術館 那須高原	08・22
富山市ガラス美術館	08・23
古田織部美術館	08・24
（公財）泉美術館	08・25
今井美術館	08・26
安来市加納美術館	08・27
大分県立美術館	08・28
（公財）二階堂美術館	08・29
岐阜現代美術館	10・22
中村屋サロン美術館	10・23
堺 アルフォンス・ミュシャ館	10・24
はつかいち美術ギャラリー	10・25
田中一村記念美術館	10・26
新居浜市美術館	10・27

〔事務局から〕	号・頁
全国美術館会議 事務局からの連絡（無記名）	01・45
東日本大震災復興対策委員会の活動について／平成 24 年度第 1 回理事会および第 61 回総会について（無記名）	02・26
文化財レスキューの成果と課題を考える	
村上博哉（国立西洋美術館）	03・29
平成 25 年度第 1 回理事会および第 62 回総会について	
生島達久（国立西洋美術館）	04・32
福島県内の文化財救援について 村上博哉（国立西洋美術館）	05・30
平成 26 年度第 1 回理事会および第 63 回総会について	
水野元洋（国立西洋美術館）	06・31
文化財防災のためのネットワーク 村上博哉（国立西洋美術館）	07・31
第 64 回総会について 村上博哉（国立西洋美術館）	08・31
新たな事務局体制について 前山裕司（埼玉県立近代美術館）	09・31
第 65 回総会について 前山裕司（埼玉県立近代美術館）	10・35

〔特別記事等〕	号・頁
ごあいさつ 青柳正規（全国美術館会議会長）	01・01
ごあいさつ 高階秀爾（全国美術館会議企画委員長）	01・02
全美事務局の初期活動と石巻レスキュー	
村上博哉（国立西洋美術館）	01・04
気仙沼市における文化財レスキューの状況	
川島秀一（リアス・アーク美術館）	01・07
全美 陸前高田市立博物館被災美術作品等救援活動について	
浜田拓志（和歌山県立近代美術館）	01・09
6 年問を振り返って 青柳正規（全国美術館会議前会長）	04・F-01
ごあいさつ 建島哲（全国美術館会議会長）	04・01
企画委員会委員長に就任して	
雪山行二（全国美術館会議企画委員長）	05・01

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

アート印刷株式会社	株式会社集英社
有限会社アート・フリース（大阪美術）	株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」
株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ	一般社団法人全国美術商連合会
株式会社アトリエリーブ	公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団
有限会社イー・エム・アイネットワーク	大日本印刷株式会社
イカリ消毒株式会社	株式会社丹青研究所
イセ文化財団	株式会社 DNP アートコミュニケーションズ
株式会社 印象社	株式会社 TT トレーディング
株式会社 NHK エデュケーションナル	株式会社東京美術倶楽部
株式会社 NHK プロモーション	凸版印刷株式会社
M&I アート株式会社	株式会社 トップアート鎌倉
影山幸一（アートプランナー・デジタルアーカイブ）	日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
株式会社加島美術	日本通運株式会社
カトーレック株式会社	株式会社美術出版社
公益財団法人かながわ国際交流財団	美術年鑑社 新美術新聞
湘南国際村学術研究センター	株式会社伏見工芸
関西ペイント販売株式会社	有限会社丸栄堂
株式会社ギャルリーためなが	ヤマトロジスティクス株式会社
株式会社求龍堂	株式会社ユニークポジション
株式会社キュレイターズ	読売新聞東京本社
協同組合美術商交友会	ライトアンドリヒト株式会社
株式会社グッドフェローズ	株式会社レンブラント
株式会社クレヴィス	早稲田システム開発株式会社
株式会社廣済堂	

（五十音順）

事務局から

第 65 回総会について

企画担当幹事 前山裕司（まえやま ゆうじ・埼玉県立近代美術館）

2016 年 5 月 26 日（木）・27 日（金）の両日、福岡県福岡市で行われた平成 28 年度第 1 回理事会及び第 65 回総会についてご報告します。今回の総会の開催にあたっては、担当館の九州国立博物館、福岡県立美術館、福岡市美術館、福岡アジア美術館にご尽力いただきました。4 館の皆様にあらためてお礼申し上げます。

26 日午前にホテルニューオータニ博多で開かれた理事会では、総会審議に先立って、前年度事業報告及び決算、今年度の事業計画と予算案、新入会員館の審査、役員の退任に伴う後任役員候補者について審議されました。

同日午後、同ホテルにおいて、服部誠太郎福岡県副知事と芦刈茂太宰府市長の歓迎挨拶及び宮田亮平文化庁長官の祝辞（代読）の後、会員館 149 館・236 名の出席により、九州国立博物館の島谷弘幸館長を議長として総会が開催されました。審議事項としては平成 27 年度事業報告及び収支決算、平成 28 年度事業計画案及び予算案に続き、新入会館が承認されました。

岐阜現代美術館、中村屋サロン美術館、堺 アルフォンス・ミュシャ館、はつかいち美術ギャラリー、田中一村記念美術館、新居浜市美術館の 6 館が新たに入会し、退会館はなかったため会員館数は 381 館となりました。

また、福原義春理事（東京都写真美術館前館長）と榎本徹理事（岐阜県現代陶芸美術館前館

長）の退任に伴い、理事会から提出された役員候補者について審議され、郡山市立美術館の佐治ゆかり館長と豊田市美術館の村田真宏館長が新たに理事に選任されました。

その他の議案として、個人会員の創設及びそれに伴って会員を正会員、個人会員、賛助会員とする規約の改正も承認されました。

報告事項では、雪山行二企画委員長（富山県立近代美術館長）の挨拶に続き、各研究部会の幹事の方々から前年度の活動報告と今年度の活動計画の説明が行われました。続いて、東京藝術大学大学美術館で 5 月 17 日から 6 月 26 日まで開催の展覧会「いま、被災地から一岩手・宮城・福島美術と震災復興」の開催にいたる経緯など、東日本大震災復興対策委員会の活動について、山梨俊夫委員長（国立国際美術館長）より報告がありました。また、4 月 14 日以降続発する熊本地震の被災状況について、熊本市現代美術館の桜井武館長の臨場感あふれる報告と、調査に行かれた福岡市美術館の渡抜由季学芸員の報告がありました。

その他報告事項として、ホームページ会員専用ページへのログイン方式が、個別に設定するパスワードに変更される予定であるとの説明が宮武弘ホームページ部会幹事からありました。最後に、文化庁から美術品補償制度について利用を促す説明がありました。

総会に続き、美術館運営制度研究部会による特別セッション「美術館の原則と美術館関係者の行動基準」が開かれました。雪山企画委員長と山梨部会長が登壇し、行動基準の検討に至る歴史的経緯や研究部会を中心に推敲を重ねてきた第8草案について説明がありました。質疑応答では基本的な疑問も投げかけられましたが、昨年度の学芸員研修会に引き続き、検討の機会が設けられたことは非常に有意義であったと思います。

総会2日目の27日は、担当館の九州国立博物館のご配慮で、展示室だけでなく、バックヤードが見学できたのは貴重な機会でした。また、歓迎行事として「福岡市内の美術館等視察」と「古都太宰府視察」の見学バスツアーが行われました。

今回の第66回総会は、神奈川県立近代美術館に担当館をお願いして、2017年5月25日・26日に神奈川県鎌倉市で開催されます。ぜひ多くの会員館にご参加いただくようお願いします。

編集後記

『ZENBI』も10号を迎えた。順調に発行を重ねることができたのは、原稿を寄せていただいた方々、そして加盟館と事務局の御協力の賜物と心より感謝を申し上げる。ささやかな回顧として本号にこれまでの総目次を掲載した。美術館をめぐる状況を定点観測するという所期の目的が幾分かでも反映されていれば編集者としては嬉しい。

創刊号の編集会議を行ったのは東日本大震災の直後であったことを今も生々しく思い出す。あれから5年が経過したが、オリンピックに浮かれる首都とはうらはらに東北の被災地の復興は遅々として進まず、先日熊本で大きな地震があった。先般の総会でも報告があったが、全国美術館会議の存在意義の一端が震災や水害、あるいは原子力災害といった災厄から美術作品を守ることにある点が次第に明らかになりつつあるのではなかろうか。この意味で本号の全美フォーラムに噴火というまさに未曾有の天災に対する美術館の対応についての記事を掲載することができたことには大きな意義がある。

今日、美術館が直面しているのは表現の自由をめぐる危機であろう。展示に対して有形無形の圧力が加えられ、それどころか表現の自由を守る最後の砦であるべき美術館がなにものかの意図を忖度して自己検閲を行うという信じられない状況さえも発生している。美術館を横断する組織である全国美術館会議の機関誌でかかる問題を論じることが困難な事情は承知している。しかし表現の自由とは美術館活動の根幹に関わる問題ではないか。特定の美術館や個人を批判することが目的ではない。美術館に関わる者の寄稿によって成立している機関誌として、この問題についての建設的な議論を「全美フォーラム」に寄せていただくことを美術館関係者に切望して、記念すべき号の編集後記の筆を擱く。 (〇)

『ZENBI』では、
次の要領で広く皆さんからの
原稿をお待ちしています。

〔原稿の内容〕	・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。 ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。 ・原稿には表題を付してください。
〔投稿の資格〕	・全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。 ・匿名の投稿は受けつけません。
〔投稿に係る詳細〕	・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。
〔締切〕	・第11号(2017年1月発行予定)に関しては10月31日、 第12号(2017年7月発行予定)については4月30日を締切とします。(当日必着)
〔提出先〕	〈メールの場合〉 s-osaki@pref.tottori.jp (尾崎) aoyama@ma7.momak.go.jp (青山) 〈郵送の場合〉 〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 京都国立近代美術館内 全国美術館会議機関誌部会 幹事 青山杏子
〔問い合わせ先〕	内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。 〒680-0011 鳥取市東町2-124 鳥取県立博物館内 全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

- 全般事項
 - 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
 - 投稿原稿は他誌(電子媒体を含む)に発表されていないものに限る。
 - 原稿(写真を含む)は原則として電子メールで提出すること。
 - 原稿は原則として2,000字程度とする。
- 投稿文の採否
 - 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会(以下「部会」という。)に一任とする。
 - 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。
- 原稿について
 - 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
 - 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
 - 個人を特定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
 - 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。
- 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。
- 著作権について
 - 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
 - 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典(掲載誌名、巻号ページ、出版年)を記載するのが望ましい。
- その他
 - 原稿料は支払わない。
 - 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。